Hokkaido University News

北大時報

平成31年

3

No. 780 March 2019

平成30年度「北海道大学総長表彰」表彰式を挙行 平成30年度北海道科学技術賞に本学関係者ら3氏 北海道大学一般入試(前期日程・後期日程)及び私費外国人留学生入試の 実施と合格者の発表



目次

3







高等教育推進機構 日本語研修コース修了式

■ 全学ニュース

- 1 平成30年度「北海道大学総長表彰」表彰式を挙行
- 2 平成30年度北海道科学技術賞に本学関係者ら3氏
- 3 北海道大学一般入試(前期日程・後期日程)及び私費外 国人留学生入試の実施と合格者の発表
- 6 北大フロンティア基金
- 8 「国民との科学・技術対話」推進に関する研究支援事業 高校生に向けた講義を実施
- 9 北海道大学広報特派員(広報インターンシップ)制度初 の修了生を認定
- 10 平成30年度補正予算(第2号)(本学関係分)の主要事項
- 10 平成30年度国立大学法人運営費交付金の追加配分(本学 関係分)の主要事項
- 10 2019年度予算案(本学関係分)の主要事項
- 11 平成30年度現代日本学プログラム課程卒業論文発表会を 開催
- 11 高等教育推進機構日本語研修コース修了式(2018年10月 入学者)
- 12 平成30年度事務職員海外派遣研修受講者による報告会を 開催
- 13 第1回日露産官学連携実務者会議を開催
- 14 日本留学海外拠点連携推進事業主催日本留学フェア (於ロシア連邦・ハバロフスク) を開催
- 15 ウガンダの首都カンパラで「日本留学フェア」を開催
- 16 ザンビア共和国ザンビア大学と「第1回大学間交流協定 レビュー会合」を開催
- 17 人材育成本部上級人材育成ステーションS-cubicで第38 回「赤い糸会&緑の会」を開催
- 18 海外サイトビジット (シリコンバレー) を実施
- 19 本学技術職員が分子科学研究所技術研究会にて報告
- 20 高等教育研修センターにて研修会を開催
- 22 第二農場及び植物園の建築物が耐震改修優秀建築賞を受賞

■部局ニュース

23 保健科学研究院が室蘭市と連携協定を締結

- 23 低温科学研究所がリスボン新大学化学及び生物技術研究 所と部局間交流協定を締結
- 24 「データサイエンス公開シンポジウム」を開催
- 25 2019年度薬学実務実習開始セレモニーを挙行
- 25 平成30年度薬学研究院FD講演会を開催
- 26 先端生命科学研究院でFDSD研修会「総会2018」を開催
- 27 「マネジメント、企業オーナーを目指す人のための企業 財務会計入門編」を開催
- 27 工学系部局で転倒防止活動への取組みを実施
- 28 水産科学院・水産学部主催「業界研究セミナー」を開催
- 29 平成30年度北海道大学北方生物圏フィールド科学センター耕地圏・水圏ステーション技術職員専門研修を開催
- 30 「本は脳を育てる」図書展示を開催
- 30 北大病院の医師が出演するラジオ番組が4月からスタート!

■ 定年退職を迎えるにあたって 31

■ レクリエーション

52 昭和新山国際雪合戦大会に今年も出場

■ 諸会議の開催状況 53

■ 学内規程 53

■研修

55 平成30年度国立大学法人北海道大学会計職員アドバンス 研修「伝達力研修」

■ 表敬訪問 56

▲ 人事 56

56 新任教授紹介



保健科学研究院 室蘭市と連携協定を締結



薬学研究院FD講演会



附属図書館図書展示



北海道大学病院 ラジオ番組が4月からスタート

表 紙:一般入試前期日程の合格発表(2019.3.7, 関連記事3頁に掲載)

裏表紙:北の鉄道風景⑫ 塘路湖冬景色

■全学ニュース

平成30年度「北海道大学総長表彰」表彰式を挙行



被表彰者と列席者による記念撮影

2月22日(金), 学術交流会館第一 会議室において「教育研究総長表彰」 「教育研究支援業務総長表彰」表彰式 が執り行われ、関係者列席のもと、笠 原正典総長職務代理から被表彰者に. 賞状及び報奨金(目録)が授与されま した。

教育研究総長表彰は、教育活動及び 研究活動を通し、特に優れた功績をあ げた教員を, また, 教育研究支援業務 総長表彰は、業務改善等の取り組みを 通し優れた功績をあげた職員を顕彰す ることにより, 本学の活性化と更なる 発展に資することを目的としたもので

なお、このたび表彰を受けられた 方々は、下記のとおりです。

(総務企画部人事課厚生労務室)

<教育研究総長表彰>

所属	氏	名	所	属	E	£	4	名
地球環境科学研究院	大 原	雅	低温科学研究所		木	村	勇	
薬学研究院 薬学研究院	原島松永	秀 吉 茂 樹	触媒科学研究所			a Ka walsk		yı
農学研究院	志村	華 子	数理・データサイエン	ス教育研究センター		3山	美	j
教育学研究院	近 藤	健一郎	高等教育推進機構		Щ	\mathbb{H}	智	
メディア・コミュニケーション研究隊	Stephanie Stephanie	Assmann	高等教育推進機構		池	\mathbb{H}	文	
工学研究院	伊藤	肇	高等教育推進機構		髙	橋		3
工学研究院	長谷川	靖 哉	学生総合相談センター		児兒	天野	7	

<教育研究支援業務総長表彰>

最優秀賞				
技術部門	電子科学研究所 小林 健太郎			
優秀賞				
事務部門	附属図書館 千葉 浩之		医療部門	北海道大学病院 検査・輸血部
		ı		
奨励賞				
事務部門	北キャンパス合同事務部		医療部門	北海道大学病院 早坂 かすみ
技術部門	創成研究機構グローバルファシリティセンター機器分析受託部門			

平成30年度北海道科学技術賞に本学関係者ら3氏

平成30年度北海道科学技術賞を農学 研究院の川村周三特任教授, 本学名誉 教授の西村正治氏, 水産科学研究院の 安井 肇教授が受賞されました。

この賞は、科学技術上の優れた発明、 研究等を行い、北海道産業の振興、道 民生活の向上など経済社会の発展等に 功績のあった方に、知事表彰として贈 呈されるものです。

2月14日(木)に、センチュリーロ イヤルホテルにおいて、贈呈式が行わ れました。

(総務企画部広報課)



受賞者記念撮影

(川村特任教授:前列左端, 西村名誉教授:前列中央左, 安井教授:前列右から2番目)

農学研究院 川村周三特任教授

川村特任教授は、「米の収穫後技術による北海道米の品質食味の向上」の功績により受賞されました。

同氏は、米の収穫後技術の基礎研究から実用化実証試験に及んで社会実装に尽力し、北海道米の品質食味の向上に大きく 貢献しました。特に米の超低温貯蔵技術は冬の自然の寒冷空気の再生可能エネルギーを利用して米を氷点下に冷却して長期 貯蔵し、高品質保持を可能にするという画期的な技術です。

北海道米は、古くは"やっかいどう米"とも揶揄され、「食味の悪い米」という評価が一般的でした。ところが、同氏の 開発した技術の実用化により品質食味が向上し、現在では米市場及び一般消費者に北海道米の「おいしさ」が広く認知され るともに、全国的にも北海道米のおいしさの評価は大きく向上し、北海道米は良食味ブランド米としての地位を確立しまし た。

(農学院・農学研究院・農学部)

西村正治名誉教授

西村名誉教授は、「慢性閉塞性肺疾患(COPD)研究に関する世界的貢献と本邦における啓発活動」の功績により受賞さ

同氏は、多数のCOPD患者を対象に多施設共同による前向き調査を10年間にわたり実施する中で、世界で初めて肺CT検 査を導入し、肺機能の経年的変化や急性増悪の頻度、予後等を明らかにしました。また、COPD診断と治療に関する国際ガ イドラインの作成や、呼吸領域で最も影響の大きい医学雑誌の一つ「米国胸部疾患学会雑誌」の編集に参画し、その活動に 大きく貢献しました。

COPDは、咳・痰・労作時息切れが特徴で、主に喫煙する中高年者に発症する重大な肺疾患でありながら、その認知度の 低さが適正な診断・治療の障害となっていましたが、同氏のこうした国内外における活動は、早期診断と正しい治療を啓発 し、道民の健康寿命延伸に大きく貢献しただけでなく、Hokkaidoという名称を世界のCOPD研究者に知らしめることに繋 がりました。

(医学院・医学研究院・医学部)

水産科学研究院 安井 肇教授

安井教授は、「ガゴメの特性を生かした産学官連携による産業クラスターの形成」の功績により受賞されました。

同氏は、北海道津軽海峡沿岸に生育する地域固有種である褐藻コンブ科のガゴメについて生育特性や高い粘性成分に着目し、人工合成などでは代替できない、機能性を持つ粘性多糖類「フコイダン」が発生・生長過程のなかで高濃度で含有してくることを発見しました。また、ガゴメの生理・生態を明らかにし、さらに高濃度のフコイダンを含有するガゴメの栽培方法「バイオファーミング(BF)」を確立しました。その後、行政や企業等との産学官連携を推進させることで、BFにより栽培された「BFガゴメ」の普及促進や産業化など、地域資源の有効活用にも取り組み、北海道発や函館発のブランドとして広く知られるまでに至りました。ガゴメはその特性から食用だけではなく化粧品、化成品、医療用原材料などに幅広く活用され、その経済効果は200億円以上の規模と試算され、北海道の産業振興に多大な貢献をしました。

(水産科学院・水産科学研究院・水産学部)

北海道大学一般入試(前期日程・後期日程)及び私費外国人留学生入試の実施と合格者の発表

平成31年度一般入試の前期日程試験は2月25日(月)・26日(火)に,後期日程試験は3月12日(火)に実施しました。 また,私費外国人留学生入試第2次選考は2月15日(金)に実施しました。

各試験の実施状況等は、次のとおりです。

1. 前期日程

志願者は5,843名で、このうち、本学が指定した大学入試センター試験の受験を要する教科・科目を受験していなかった 失格者3名を除く志願者について、2段階選抜の第1段階選抜を行いました。その結果、志願者全員が合格し、個別学力検 査等の受験対象者は5,840名で、受験者は5,662名でした。

合格者は2,013名で、合格発表は、3月7日(木)午前9時に高等教育推進機構正面玄関に合格者の受験番号を掲示するとともに、本学ホームページに掲載しました。

なお、合格者の出身高校別では、道内高等学校出身者が729名で全体の36.2%。卒業年度別では、平成31年3月高等学校 卒業者が1.254名で全体の62.3%。また、男女別では女子が598名で全体の29.7%でした。

2. 後期日程

志願者は4,498名で、このうち、本学が指定した大学入試センター試験の受験を要する教科・科目を受験していなかった 失格者3名を除く志願者について、2段階選抜の第1段階選抜を行いました。その結果、4,468名が合格し、個別学力検査 等の受験対象者は4,468名で、受験者は1,889名でした。

合格者は546名で、合格発表は、3月20日(水)午後4時に高等教育推進機構正面玄関に合格者の受験番号を掲示するとともに、本学ホームページに掲載しました。

なお、合格者の出身高校別では、道内高等学校出身者が84名で全体の15.4%。卒業年度別では、平成31年3月高等学校卒業者が297名で全体の54.4%。また、男女別では女子が137名で全体の25.1%でした。

3. 私費外国人留学生入試

私費外国人留学生入試の志願者は198名で,第1次選考の合格者は64名,第2次選考の受験者は49名,合格者は20名でした。

(学務部入試課)

平成31年度一般入試(前期日程)合格者数等一覧

	学部・学科等		募集人員	受験対象者	欠席者		受験者	倍率	合格者	当	
	文系	系		97	278 (69)	7	(1)	271 (68)	2.8	107	(21)
		数	学重点選抜群	129	494 (83)	11	(3)	483 (80)	3.7	135	(21)
総合入試		物理	里重点選抜群	234	701 (91)	16	(3)	685 (88)	2.9	242	(27)
入 試	理系	化	学重点選抜群	234	624 (152)	21	(6)	603 (146)	2.6	243	(51)
l Hr V		生华	物重点選抜群	176	465 (204)	13	(5)	452 (199)	2.6	182	(73)
		総合	合科学選抜群	248	672 (230)	20	(10)	652 (220)	2.6	257	(92)
	文	学部		118	463 (191)	4	(3)	459 (188)	3.9	127	(57)
	教育	育学部	R	20	67 (31)	2	(2)	65 (29)	3.3	20	(11)
	法学	学部		140	419 (116)	7	(4)	412 (112)	2.9	141	(48)
	経	斉学部	形	140	378 (72)	8	(1)	370 (71)	2.6	147	(30)
		医生	学科	102	307 (63)	26	(5)	281 (58)	2.8	102	(19)
学部			看護学専攻	61	147 (136)	10	(9)	137 (127)	2.2	64	(61)
学部別入試	医学部	保	放射線技術科学専攻	28	75 (27)	2	(2)	73 (25)	2.6	28	(11)
試	部	健学	検査技術科学専攻	28	75 (55)	3	(4)	72 (51)	2.6	29	(21)
		科	理学療法学専攻	13	42 (17)	5	(3)	37 (14)	2.8	14	(2)
			作業療法学専攻	13	68 (40)	8	(6)	60 (34)	4.6	14	(9)
	歯	学部		30	107 (43)	4	(1)	103 (42)	3.4	30	(8)
	獣図	医学部	R	20	112 (61)	2	(1)	110 (60)	5.5	22	(13)
	水產	産学部	FIS	108	346 (73)	9	(1)	337 (72)	3.1	109	(23)
			計	1,939	5,840 (1,754)	178	(70)	5,662 (1,684)	2.9	2,013	(598)

^{※ ()} 内の数字は女子で内数

平成31年度一般入試(後期日程)合格者数等一覧

	学部・学科等		募集人員	受験対象者	欠席者		受験者	倍率	合格者	
	文学	学部		37	317 (107)	181 (52)	136 (55) 3.7	46 (13)
	教育	育学 音	R	10	121 (45)	74 (:	29)	47 (16) 4.7	11 (4)
	法与	学部		40	406 (89)	213 (48)	193 (41	4.8	56 (17)
	経済	斉学音	R	20	220 (28)	142 (19)	78 (9	3.9	23 (2)
		数学	^丝科	13	121 (7)	52 (1)	69 (6	5.3	12 (0)
		物理	里学科	10	125 (11)	74 (5)	51 (6	5.1	9 (1)
	理学	化学	^丝科	23	176 (28)	93 (13)	83 (15	3.6	24 (4)
	部	生物	科学科 生物学専修分野	10	82 (38)	42 (17)	40 (21) 4.0	11 (3)
		生物和	斗学科 高分子機能学専修分野	5	56 (17)	24 (8)	32 (9) 6.4	3 (1)
学		地政	求基科学科	5	66 (18)	32 (7)	34 (11	6.8	5 (0)
学部別入試	医	保	放射線技術科学専攻	7	47 (24)	33 (17)	14 (7) 2.0	7 (5)
入計	医学部	健学	検査技術科学専攻	7	96 (73)	58 (45)	38 (28) 5.4	8 (8)
武	디	4 科	理学療法学専攻	4	31 (10)	15 (2)	16 (8) 4.0	4 (4)
	歯与	学部		8	174 (77)	86 (:	34)	88 (43) 11.0	8 (5)
	薬引	学部		24	241 (94)	140 (!	52)	101 (42) 4.2	26 (9)
		応月	月理工系学科	37	282 (30)	190 (17)	92 (13) 2.5	38 (6)
	工学	情報	エレクトロニクス学科	38	330 (21)	218 (19)	112 (2) 2.9	38 (0)
	部	機桶	找知能工学科	30	265 (17)	176 (6)	89 (11	3.0	26 (1)
		環境	竟社会工学科	53	415 (62)	226 (3	33)	189 (29	3.6	55 (7)
	農学	学部		53	408 (130)	255 (75)	153 (55) 2.9	59 (20)
	獣固	医学音	ß	15	90 (49)	34 (2	20)	56 (29	3.7	15 (10)
	水產	全学音	ß	50	399 (109)	221 (62)	178 (47	3.6	62 (17)
			計	499	4,468 (1,084)	2,579 (5	81)	1,889 (503	3.8	546 (137)

※()内の数字は女子で内数

平成31年度私費外国人留学生入試合格者数等一覧

学部・学科等

	部・学科・専攻・コース等	志願	者	第1次選考	合格者	第2次選考	受験者	合 格	者
文学部	人文科学科	11	(3)	0	(0)	0	(0)	0	((
教育学部	教育学科	9	(7)	2	(2)	1	(1)	0	((
法学部	法学課程	10	(3)	4	(1)	3	(1)	3	(:
	経済学科	17	(3)	4	(1)	3	(1)	0	((
経済学部	経営学科	10	(3)	0	(0)	0	(0)	0	((
	数学科	4	(1)	4	(1)	2	(0)	0	((
				i					
	物理学科	10	(3)	6	(3)	4	(1)	2	((
	化学科	4	(2)	0	(0)	0	(0)	0	((
理学部	生物科学科	7	(1)	1	(0)	1	(0)	0	((
	(生物学専修分野)	6	(1)	1	(0)	1	(0)	0	((
	(高分子機能学専修分野)	1	(0)	0	(0)	0	(0)	0	((
	地球惑星科学科	2	(1)	0	(0)	0	(0)	0	((
	医学科	2	(1)	2	(1)	2	(1)	0	((
	保健学科	5	(1)	3	(0)	3	(0)	1	((
	看護学専攻	-	\				······		
医学部	放射線技術科学専攻	9	(0)	1	(0)	1	(0)	1	((
四十四		2		1		1 2		1	
	検査技術科学専攻	3	(1)	2	(0)		(0)	0	((
	理学療法学専攻	-							
	作業療法学専攻	-		-	-	-	-	-	
歯学部	歯学科	2	(0)	1	(0)	1	(0)	0	((
薬学部	薬科学科	4	(2)	1	(1)	0	(0)	0	((
来于即	薬学科	3	(2)	2	(1)	2	(1)	1	(:
	応用理工系学科	12	(4)	4	(2)	3	(1)	2	(
	応用物理工学コース	2	(0)	0	(0)	0	(0)	0	((
	応用化学コース	7	(3)	2	(2)	1	(1)	1	(
	応用マテリアル工学コース	3	(1)	2	(0)	2	(0)	1	()
		17	(5)		(0)		(0)	1	
	情報エレクトロニクス学科			3		3			
	情報理工学コース	11	(3)	1	(0)	1	(0)	0	((
	電気電子工学コース	2	(0)	2	(0)	2	(0)	1	((
	生体情報コース	2	(1)	0	(0)	0	(0)	0	((
	メディアネットワークコース	-	-	-	-	-	-	-	
工学部	電気制御システムコース	2	(1)	0	(0)	0	(0)	0	((
	機械知能工学科	13	(2)	4	(0)	3	(0)	3	((
	機械情報コース	11	(2)	4	(0)	3	(0)	3	((
	機械システムコース	2	(0)	0	(0)	0	(0)	0	((
	環境社会工学科	25	(13)	9	(5)	7	(4)	5	()
	社会基盤学コース	4	(2)	2	(1)	1	(1)	1	(
	国土政策学コース		(0)		(0)		(0)	0	()
		1		1		1			
	建築都市コース	12	(7)	3	(2)	2	(1)	2	(
	環境工学コース	7	(4)	3	(2)	3	(2)	2	(
	資源循環システムコース	1	(0)	0	(0)	0	(0)	0	()
	生物資源科学科	3	(1)	0	(0)	0	(0)	0	((
	応用生命科学科	6	(3)	1	(1)	1	(1)	1	(
	生物機能化学科	6	(3)	1	(0)	1	(0)	0	((
農学部	森林科学科	2	(1)	2	(1)	2	(1)	0	()
	畜産科学科	4	(2)	1	(1)	1	(1)	0	()
	生物環境工学科	1	(0)	0	(0)	0	(0)	0	
			((0)		\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\		
※FIC かか	農業経済学科	-		-	(0)	-	(0)	-	
獣医学部	共同獣医学課程	4	(2)	4	(2)	4	(2)	0	(
	海洋生物科学科								
水産学部	海洋資源科学科	5	(2)	5	(2)	2	(0)	1	((
小 座子司	増殖生命科学科	Э	(4)	Э	(4)	4	(0)	1	((
	資源機能化学科	1				1	- 1		

※ () 内の数字は女子で内数

国・地域別

国・地域	志 願	者	第1次選考	合格者	第2次選考	受験者	合 格	者
中国(香港を含む)	134	(57)	52	(24)	38	(16)	14	(7)
韓国	54	(11)	11	(1)	10	(0)	5	(0)
台湾	8	(2)	1	(0)	1	(0)	1	(0)
カナダ	1	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
マレーシア	1	(1)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
合 計	198	(71)	64	(25)	49	(16)	20	(7)

※()内の数字は女子で内数

北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発 揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

募金目標額は50億円です。奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々 な事業を行っており、期限を付さない、息の長い募金活動をすることとしています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金情報

基金累計額(2月28日現在)

23,751件 4,748,296,864円

2月のご寄附状況

法人等8社,個人142名の方々から19,656,408円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいている方々のご芳名、銘板の掲示、感謝状の贈呈 について掲載させていただきます。(五十音別・敬称略)

寄附者ご芳名(法人等)

アジア航測株式会社、月島機械グループ、株式会社ツムラ、北大工学部土木41期一同、株式会社丸井足立

寄附者ご芳名(個 人)

合川 正幸	合月 勇夫	青田 欣也	浅野讃一郎	石田 治夫	伊藤 仁人	今井 久雄	入澤 秀次
岩下 秀市	大釜 淳	大島 正裕	大野 泰熙	大原 正範	大森 貴皓	岡内 省三	奥田 英信
小熊 理照	織田 健造	小田原一史	小内 透	金川 眞行	河本 充司	菊地 敦子	木下 一郎
木村 真和	藏田 伸雄	栗栖 明美	黒島 和夫	小島 洋一	小関 利行	近 祐次郎	今野 則道
齋藤 憲一	斉藤 久	坂本 大介	佐藤 雅彦	三升畑元基	志済 聡子	柴田 元	嶋﨑 敏彦
白井 盛一	杉江 和男	鈴木 貴之	瀬名波栄潤	髙岡 英俊	高橋 昌宏	高林 秀樹	竹田 幸宏
俵 明美	丹野千枝美	千葉 成子	傳 暁	土家 琢磨	土屋 裕	寺内 完	寺澤 睦
土肥 勇	遠山 剛正	徳田 順之	戸田 純子	豊田 威信	長島 郁夫	中塚 英俊	中津川孝道
永原 拓巳	西田 実弘	根本 隆志	長谷川 晃	八反田元子	桧沢 方孝	福永 悟郎	藤田 博孝
前田 博	眞木賀奈子	政氏 伸夫	町田 正人	松沢 幸一	松原 謙一	松村 欣也	松本 巧
水野 和子	三田村好矩	水戸 廸郎	皆川 一志	三野 昇	蓑輪 隆宏	宮田 信幸	村上 幸夫
森 卓也	横井 成尚	横山 考	吉田 広志	米田 功	渡辺 誠二	渡利 英道	

銘板の掲示(20万円以上のご寄附)

アジア航測株式会社、月島機械グループ、北大工学部土木41期一同

(個人)

大野 泰熙, 木下 一郎, 黒島 和夫, 小島 洋一, 近 祐次郎, 佐藤 雅彦, 千葉 成子, 傳 暁, 八反田元子, 真木賀奈子, 松村 欣也, 水野 和子, 水戸 廸郎, 米田 功, 渡利 英道

感謝状の贈呈



東 市郎 様 (平成31年2月5日)



加藤 元 様 (平成31年2月14日)



檀上 泰 様 (平成31年2月14日)



守内 哲也 様 (中央) 守内 順子 様 (右) (平成31年2月25日)

ご寄附のお申し込み方法

北大フロンティア基金ホームページの「教職員の方によるご寄附について」にアクセスして下さい。 https://www.hokudai.ac.jp/fund/howto-staff.html

①給与からの引き落とし

ホームページから「北大フロンティア基金申込書 (兼・給与口座からの引落依頼書)」をダウンロードし、ご記入の上、 基金事務室に提出してください。

②郵便局または銀行への振り込み

基金事務室にご連絡ください。払込取扱票をお送りします。

③現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、基金事務室にご持参ください。

申込書は、ホームページから「北大フロンティア基金申込書(教職員現金用)」をダウンロードしてご記入いただくか、 基金事務室にもご用意していますので、基金事務室にお越しいただいてからご記入いただくことも可能です。

④クレジットカード決済・コンビニ決済でのご寄附

北大フロンティア基金ホームページ

(https://www.hokudai.ac.jp/cgi-bin/fund/bin/xRegist.cgi) の寄附申し込みフォームから申込をお願いします。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 基金事務室 (事務局・学内電話 2017)

(総務企画部広報課)

「国民との科学・技術対話」推進に関する研究支援事業 高校生に向けた講義を実施

10月より本格的に始動した、今年度の「国民との科学・技術対話」推進に関する研究支援事業、通称 "ACADEMIC FANTASISTA"。2月は、3名の参加教員が出張講義を実施し、今年度全ての講義が終了しました。

(総務企画部広報課)

漸化式を使っていろいろな現象を数学にしてみよう!

長山雅晴教授は、自然現象や生命現象を理論的にとらえるために、数式という 言語で表現する手法、「数理モデリング」の研究をしています。数学で様々な現 象を表現する楽しさを伝え、渋滞現象を表す数理モデルについて高校生たちも一 緒に考えました。自身が教員として所属している理学部の特色や、本学の入試制 度の紹介もありました。高校生からは、「数学の奥深さや、大学の授業について 知ることができ、大学進学への意欲が高まりました」などの感想がありました。

時:2月4日(月)15:50-16:50 ■会 場:北海道札幌国際情報高等学校

■参加生徒: 1.2年生15名

■参加教員:長山雅晴(電子科学研究所教授)



数理モデルについて説明する長山教授

結晶なのにやわらかい、光るソフトクリスタルの七変化

結晶の秩序性を保ちながらもやわらかい物質である「ソフトクリスタル」。加 藤昌子教授は、蒸気にさらす、こするなどの弱い刺激に応答して色や発光現象が 変化する、ソフトクリスタルの研究を進めています。講義の後半では、高校生た ちに、すり潰すだけで完成する光る錯体づくりに挑戦してもらいました。「基礎 研究をしている段階でこの話を聞けて、とても身になりました。化学は楽しいと 感じられました」などの感想がありました。

時: 2月22日(金)13:30-15:00 \blacksquare

■会 場:札幌創成高等学校 ■参加生徒: 1,2年生17名

■参加教員:加藤昌子(理学研究院教授)



高校生も実験に参加

アイヌ民族の歴史遺産の魅力:北海道と世界を繋ぐ

加藤博文教授は、遺跡や文化的景観を調査することから、人類史や人類文化の 多様性を研究しています。縄文文化期からアイヌ文化期までを辿り、教科書には 載っていない「北海道の歴史」を解説しました。また、数千年間にわたる人々の 暮らしが地層に沿って連続的に観察できる。 礼文島浜中2遺跡の魅力について語 りました。講義の最後には、浜中2遺跡から出土した骨角器などのハンズオンも ありました。「アイヌ文化の話が、一気に世界に広がったことにワクワクした。 身近な文化が世界と共通点を持つことに感動した」などの感想がありました。

骨角器を囲んで質問タイム

 \blacksquare 時: 2月25日(月)16:30-18:00 場:北海道旭川東高等学校 ■会

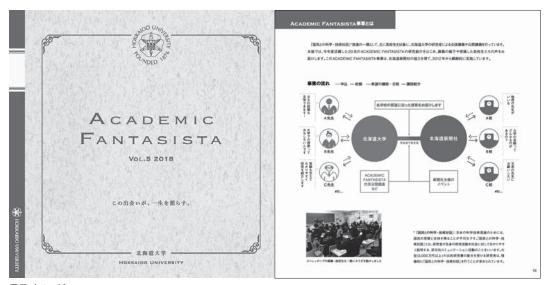
■参加生徒: 1,2年生17名

■参加教員:加藤博文(アイヌ・先住民研究センター 教授)

【冊子発行のお知らせ】

今年度のACADEMIC FANTASISTA事業をまとめた冊子を発行しました。当事業の仕組みや、参加研究者の紹介、受講 した高校生たちの声などを掲載しています。

また、当課では来年度も引き続きACADEMIC FANTASISTA事業を実施する予定です。



冊子イメージ

北海道大学広報特派員(広報インターンシップ)制度初の修了生を認定

広報室では,本学の学生に広報活動 体験の機会を提供することにより、人 材の育成に寄与し、併せて本学の情報 発信を強化することを目的として. 今 年度から広報特派員(広報インターン シップ) 制度を実施しています。

はじめての広報特派員として, 平成 30年7月11日~平成31年2月15日の 間, 生命科学院博士後期課程のDaniel Thorsten Schenzさんが広報業務(サ イエンス・ライティング)を体験しま した。活動期間中Danielさんは、広報 担当者からのレビュー・アドバイスを 得ながら, 英文プレスリリースの記事 作成4本, また, 研究者インタビュー 記事2本,及び研究紹介動画を1本作 成するなど、意欲的に活動されまし た。その結果、広報特派員としての認 定要件を満たしたことから、このたび 認定証を授与しました。

インターンシップを終えたDanielさ んからは、「とても良いメンバーに恵 まれて業務を経験することができ、感 謝しています」との感想がありまし た。4月からは、本学に設置された世 界トップレベル研究拠点プログラム 「化学反応創成研究拠点(ICReDD)」

の特任助教として広報活動に従事する ことになりました。

広報室では、これからも広報人材の 育成及び本学の情報発信の強化につな がるよう取り組んでいきます。

(総務企画部広報課)



Danielさん(中央)と広報課関係者一同

平成30年度補正予算(第2号)(本学関係分)の主要事項

平成30年度補正予算(第2号)(本学関係分)の主要事項は、次のとおりです。

事項	摘 要
第2号(平成31年2月7日予算成立) ○学校施設等の災害復旧 設備分(国立大学法人運営費交付金) 施設分(施設整備費補助金)	台風20号, 21号, 北海道胆振東部地震で被害を受けた 設備・施設の災害復旧
○学生支援施設(百年記念会館)改修 (施設整備費補助金)	(1,050㎡) ※ () は改修面積を表す

(財務部主計課, 施設部施設企画課)

平成30年度国立大学法人運営費交付金の追加配分(本学関係分)の主要事項

平成30年度国立大学法人運営費交付金の追加配分(本学関係分)の主要事項は、次のとおりです。

事項	摘 要
【特殊要因経費(退職手当)】	
○退職手当分・年俸制導入促進費分	

(財務部主計課)

2019年度予算案(本学関係分)の主要事項

2019年度予算案(本学関係分)の主要事項は、次のとおりです。

事項	摘 要
(2018年12月21日閣議決定)	
【施設整備事業】 ○デンタルイノベーション拠点整備 〈国債2-2〉	$\langle (6{,}010 ext{m}^{\!\!i}) angle$
○フロンティア資源研究棟 〈国債2-1〉	$\langle 3,\!400 ext{m}^{2} angle$
○基幹・環境整備(給水設備)	
	※〈()〉は全体改修面積,〈 〉は全体新営面積を表す

(施設部施設企画課)

平成30年度現代日本学プログラム課程卒業論文発表会を開催

1月15日(火), 学生交流ステーション大会議室において, 外国人留学生を対象とした4年間の学士課程プログラムである現代日本学プログラム課程(現プロ)の4年生による卒業論文発表会を開催しました。

発表会では、現プロ第1期生であり、今年度末に記念すべき初の卒業生となることを目指す4年生9名が、卒業論文の内容をポスター報告形式で発表しました。発表された卒業論文は、英語または日本語で執筆され、日本の教育制度や地域政策、外交政策や語学教育などの様々なテーマについて、外国人留学生ならではの視点から研究を行った成果をまとめたもので、本学において4年間日本学を学んだ集大成と

言えるものです。

発表会には、長谷川晃理事・副学長 (現代日本学プログラム課程長), 高 橋 彩総長補佐(現代日本学プログラ ム副課程長)をはじめ、同課程担当教 職員、現プロ学生など多数が出席し、 各報告者からの興味深い発表に熱心に



長谷川理事・副学長と後輩らに自分の卒業論文 について発表する現プロ第1期生

聞き入っていました。

4年生の多くは、卒業後に国内外の 企業への就職や大学院への進学を予定 しており、今後の活躍が期待されま す。

(学務部教育推進課)



髙橋総長補佐(右)と現プロ学生との積極的な 意見交換の様子

高等教育推進機構日本語研修コース修了式(2018年10月入学者)

2月15日(金), 高等教育推進機構 大会議室において, 高等教育推進機構 日本語研修コース研修生の修了式を行 いました。

この研修コースは、大使館推薦等の 国費外国人留学生、本学工学部に進学 する日韓共同理工系学部留学生、現代 日本学プログラム留学生、及び学内公 募により履修が認められた留学生に日 本語予備教育を行うため6ヶ月間開設 されたものです。

今回修了式を迎えたのは、国費外国 人留学生5名と日韓共同理工系学部留 学生7名、現代日本学プログラム留学 生16名に加え、学内公募により履修を 認められた集中日本語コース4名の計 32名です。

修了式では、教職員や指導教員の 方々が見守る中、長谷川晃高等教育推 進機構長から留学生一人ひとりに修了 証書、履修証明書及び証明書が授与さ れました。続いて、長谷川高等教育推 進機構長より日本語で今後の飛躍を祈 念する激励の言葉が述べられ、留学生 は真剣な面持ちで聞き入っていまし

最後に記念写真を撮影し、修了式は 終了しましたが、その後もしばらく、 お世話になった日本語教員や留学生同士で写真撮影や懇談が続いていました。

(学務部国際交流課)



証書を受け取る学生



集合写真 (国費外国人留学生,日韓共同理工系学部留学生,集中日本語コース留学生)



集合写真(現代日本学プログラム留学生)

平成30年度事務職員海外派遣研修受講者による報告会を開催



集合写真

2月7日(木), 百年記念会館大会 議室において、「平成30年度事務職員 海外派遣研修受講者による報告会」を 開催しました。

今回は、「平成30年度第1回及び第 2回北海道大学事務職員海外短期集中 研修」「平成30年度北海道大学事務職 員海外語学研修」及び「独立行政法人 日本学術振興会国際学術交流研修」を 受講した計6名の事務職員が、スライ ドによる写真等を交え、研修内容、海 外における生活,研修成果等を報告し ました。会場には、受講者の所属部署 の職員や将来受講を考えている事務職 員など、20人を超える職員等が集ま り. 熱心に耳を傾けました。

受講者からは、海外の大学の国際化 への取り組みを学んだことや、異文化 交流を通じて国際的な視野を広げられ たこと、英語によるコミュニケーショ ン能力を高められたことなど、現地に おいて実際に経験してみなければ得ら



関理事・事務局長による挨拶

れない多くの貴重な体験が生き生きと 語られました。本研修の受講者には, 本学の国際化推進に資するため、学ん だことを今後の業務に役立てていただ くことが期待されます。

来年度以降も同様の研修が実施され ますので, 事務職員の方の積極的な受 講をお待ちしています。

(国際部国際企画課)









受講者の報告の様子

第1回日露産官学連携実務者会議を開催



参加者集合写真

2月28日(木)に,筑波大学東京 キャンパスにおいて,「第1回日露産 官学連携実務者会議」を開催しまし た。

この会議は、本学と新潟大学が共同 採択された文部科学省の平成29年度 「大学の世界展開力強化事業~ロシア 等との大学間交流形成支援~(タイプ B:プラットフォーム構築プログラム)」の事業(HaRP事業)の取組の 一つで、日露交流を行う産官学の関係 者が一堂に集い、グッドプラクティス の共有、日露の経済協力を支える人材 育成のための情報交換などを行うこと で、産官学連携の強化、日露交流の発 展及び促進を目的としたものです。

会議には、日露交流を行う大学(日本の大学22校、ロシアの大学7校)に加え、文部科学省、経済産業省、企業・団体等(17の機関・団体)から約100名が参加しました。

第1部の「採択校活動状況報告会」では、本学の笠原正典理事・副学長及び文部科学省の進藤和澄高等教育局高等教育企画課国際企画室長による挨拶から始まり、続いて大学の世界展開力強化事業(ロシア)の採択校から、これまでの活動の成果や課題、今後の展

望についての紹介及び質疑応答が行われました。今回初めての試みとして,同事業採択校のみならず,日露の交流を行う大学や企業・団体等に対して取組を紹介することも目的として,参加者に制限を設けずに実施しました。

第2部の本会議においては、笠原理事・副学長及び文部科学省の進藤室長の挨拶に続いて、(1) HaRP事業における産官学連携の説明、(2) 新潟大学及びクラスノヤルスク医科大学による医療分野の取組の発表、(3) 日本又はロシアでインターンシップを経験した4人の学生の発表、(4) モスクワ国立大学及び太平洋国立大学による産官学連携に対する期待についての発表がそれぞれ行われました。

その後、日露でのインターシップをテーマとしてパネルディスカッションが行われ、本学の瀬戸口剛工学研究院副研究院長をモデレーターとして、パネリストである株式会社日建設計総合研究所、Man to Man株式会社、愛知県からそれぞれのインターンシップを通じた人材育成の活動について紹介があった後、近畿大学及び双日株式会社から、インターンシップの推進方策について、これまでの経験談を基にした

大学と産業界それぞれの立場からのコメントがありました。パネルディスカッションにおいては、聴衆からも活発な質問が寄せられ、今回のテーマへの関心の高さがうかがえました。会議の最後には、経済産業省の靏田将範通商政策局欧州課長から、8項目の経済協力プランを支える人材育成への期待について挨拶がありました。

本会議は、日露交流に関心のある大学及び関連の自治体、企業、団体等が一堂に会する貴重な機会であり、この会議を契機として産官学連携による日露交流が一層促進されることを期待しています。

(国際部国際連携課)



会場の様子



笠原理事・副学長による開会の挨拶



挨拶する文部科学省進藤国際企画室長



パネルディスカッションの様子

日本留学海外拠点連携推進事業主催日本留学フェア (於ロシア連邦・ハバロフスク) を開催

本学は、2018年10月1日にオール ジャパンの日本留学サポートを実現す る「日本留学海外拠点連携推進事業」 に採択され、筑波大学及び新潟大学と 共同で本事業を進めています。

今回、当事業の活動として、本学が 中心となり、2月8日(金)・9日 (土) にロシア連邦ハバロフスク市の 太平洋国立大学において、日本留学 フェアを開催しました。

ロシア極東地域は日本と地理的に近 く, 歴史的にも日本と深い関係にある ことから, ロシア連邦の中でも日本留 学に関心のある学生が多く存在する地 域です。今回の日本留学フェアは、ハ バロフスクに位置し、本学と2014年に 大学間交流協定を締結するなど交流が 盛んなほか、本学が採択された「大学 の世界展開力強化事業 (ロシア)」プ ラットフォーム構築プログラムにおい ても重要な役割を担っている太平洋国 立大学の協力を得て, 同大学を会場に 実施しました。

本フェアは在ハバロフスク日本国総 領事館の協力のもと実施され、日本か らは, 本学, 東海大学, 千葉大学, 新 潟薬科大学,新潟大学,筑波大学の6 大学が現地参加したほか、9大学*が 資料参加しました。

8日(金)のプログラムは、フェア の開会にあたり、アイヌ・先住民研究 センターの加藤博文教授、在ハバロフ スク日本国総領事館門倉俊明総領事代 理から挨拶がありました。その後、現 地参加大学による各大学のプレゼン テーションが行われました。会場は満 席となり、盛会のうちに全体会は終了 しました。その後に実施した個別相談 会では、現地参加大学ごとのブースを 設置し,参加者からの個別相談に対応 したほか, 資料提供コーナーを設置 し、日本への留学及び各大学に関する 情報提供を行いました。

9日(土)のプログラムは、セルゲ イ・イワンチェンコ太平洋国立大学長 から開会の挨拶をいただいた後、アイ ヌ・先住民研究センター加藤教授, 在 ハバロフスク日本国総領事館門倉総領 事代理から挨拶がありました。次に, 在ハバロフスク日本国総領事館アンド レイ・シェーペレフ現地職員から日本 の国費留学制度の概要について説明が 行われ、続いて、現地参加大学による 各大学のプレゼンテーションが行われ ました。休憩をはさんだ後、新潟大 学高橋秀樹副学長から "A History of

Japanese Traditional Costumes", 本 学加藤教授から "Siberian Studies for Japan: Human History, Environment, Cultural Diversity"と題した模擬講 義がそれぞれ行われ、前日同様、会場 は満席となり盛会のうちに全体会は終 了しました。その後、引き続き、前日 と同様の形式で個別相談会を実施しま した。

今回のフェア2日間では、会場と なった太平洋国立大学の学生を中心に 現地の大学生のほか、高校生、保護者 など約200名(2月8日:約65名, 2 月9日:約135名)の参加があり、当 地での日本留学への関心の高さがうか がえました。

本学では、引き続き、ロシアの教育 機関, 行政, 支援機関や企業等と連携 し、日本とロシア・CIS地域の学術・ 学生交流を促進する活動を実施してい く予定です。

**京都大学, 近畿大学, 東京大学, 東北大学, 富山大学, 長崎大学, 名古屋大学, 横浜国 立大学,立命館アジア太平洋大学(計9大 学, 50音順)

(国際部国際連携課)



太平洋国立大学教育学部



日本留学フェア全体会



ブースの様子

ウガンダの首都カンパラで「日本留学フェア」を開催

本学アフリカルサカオフィスは、2 月7日(木), ウガンダ共和国首都カ ンパラで「日本留学フェア」を開催し ました。本フェアは、サブサハラ・ア フリカ地域の優秀な学生の日本留学誘 致を目的に、文部科学省から受託して いる「日本留学海外拠点連携推進事 業 | の一環として実施したものです。

「アフリカの真珠」と称されるほど 美しい自然をもつウガンダは、1986年 に就任した現大統領の強いリーダー シップの下、堅調に経済発展を遂げ、 現在も5%の経済成長率を維持してい ます。日本からも、大企業から中小企 業まで幅広い層・業種から投資や起業 が行われており、2013年に日本ウガン ダ経済推進協会が設立されるなど,経 済的な交流が活発化しています。本 フェアの共催校であるマケレレ大学 は、当国がイギリス保護領下にあった 時代に創設されたアフリカ屈指の名門 校で、現在もアフリカの大学ランキン グで上位を維持しています。10を超え る日本の大学が大学間もしくは部局間 協定を結び、国際協力機構 (JICA) もその教育・研究の現代化に助力して きました。

本フェアは、在ウガンダ日本国大使 館、日本学術振興会(ISPS)ナイロ ビ研究連絡センター、JICA、ウガン ダ事務所, あしながウガンダ心塾, 日 本学生支援機構 (JASSO) の協力の もと実施され、日本からは本学、京都 大学、弘前大学、立命館アジア太平洋 大学が参加しました。本学からは、国 際連携機構の川野辺創副機構長,経済 学研究院の高井哲彦准教授, 獣医学研 究院の中山翔太助教, アフリカルサカ

オフィス所長の奥村正裕獣医学研究院 教授、同オフィス留学コーディネー ターの成澤徳子特任助教と大門 碧特 任助教、国際部の齋藤幸義課長と安高 由香利特定専門職員が参加しました。

まず、マケレレ大学研究・大学院教 育局のデイビッド・オウィニー副局長 と川野辺副機構長、来賓の堀井水元臨 時代理大使から開会挨拶と祝辞をいた だきました。次に、在ウガンダ日本国 大使館, JASSO, JICA, JSPS, あし ながウガンダ心塾から、日本留学制 度, 奨学金や研究交流にかかるプログ ラムの説明がありました。続いて、2 名の日本留学経験者がその経験に基づ き講演を行いました。最後に、日本の 参加大学が各校の研究教育の特色と留 学制度の概要について紹介し、日本の 参加大学・機関によるブースでの個別 説明が熱心に行われました。日本から 資料参加した25大学*の案内資料は ブース横に展示され、参加者が自由に 閲覧し、持ち帰りました。

本フェアは、新聞・ラジオでの広報 と関係機関・大学による広報協力に加 え,マケレレ大学の学生が中心となり 同大学学生寮で参加を呼びかけた結 果, 市内の大学生, 高校生, 社会人, 約170名の参加があり、盛会となりま した。

また、学部生の留学誘致も視野に入 れ、日本の参加大学が現地の優良高等 学校3校を視察する機会を設けまし た。マウント・セイント・マリーズ・ カレッジ・ナマグンガ及びトリニ ティ・カレッジ・ナビンゴでは、大学 進学希望者を対象とした小セミナーを 開催し、それぞれ約100名、約130名の 高校生が参加しました。セミナー後に は、日本留学後の就職状況を含め、多 くの質問が高校生から寄せられまし た。一方、学生の試験期間と重なった キングズ・カレッジ・ブドーでは、学 生対象のセミナーに代わり、約30名の 教員に対して日本留学に関する説明と 個別面談を行いました。参加者のなか には、自身のキャリアアップのために 留学を志す教員もおり、学生への進路 指導だけでなく教員の留学先としても 日本留学をアピールすることができま した。高等学校視察の調整にあたって は, 立命館アジア太平洋大学にご協力 いただきました。

ウガンダ共和国は、1997年から初等 教育を無償化するなど教育に力を入れ ており、 高等教育を受けることを目指 す人の数が増え続けています。しかし ながら、マケレレ大学のように高度な 教育を提供できる高等教育機関は限ら れ、学生の国際流動性が高くなってい ます。高いレベルの教育制度を元来も ち教育に熱心な国において今回のイベ ントを実施したことで, 日本留学の効 果的なPRに成功しました。

**会津大学, 愛媛大学, お茶の水女子大学, 関西大学, 九州大学, 九州工業大学, 神戸 大学, 国際大学, 芝浦工業大学, 上智大学, 東京大学, 東京外国語大学, 東京海洋大学, 東京国際大学、同志社大学(大学院ビジネ ス研究科グローバル経営研究専攻), 東北 大学, 鳥取大学, 富山大学, 長崎大学, 名 古屋大学, 広島大学, 山形大学, 山梨大学, 横浜国立大学, 早稲田大学(計25大学, 50 音順)

(国際部国際連携課)



川野辺副機構長による挨拶



本学ブースでの個別相談



高校でのセミナー開催

ザンビア共和国ザンビア大学と「第1回大学間交流協定レビュー会合」を開催



参加者集合写真

2月8日(金), ザンビア共和国の 首都ルサカ市において、ザンビア大学 と本学の「第1回大学間交流協定レ ビュー会合」を開催しました。ザンビ ア大学は、イギリスから独立した2年 後の1966年に設立された同国最初の大 学で, 現大統領をはじめ, 政界や産業 界等, 多くの分野において優秀な人材 を輩出し、同国の発展を牽引してきま した。本学は、日本政府の支援によっ て、1980年代半ばに建設された同大学 獣医学部への技術協力プロジェクトに 携わったことをきっかけに、30年以上 にわたり研究協力,教育交流等を続 け、2011年3月にザンビア大学との間 で大学間交流協定を締結しました。

一昨年(2017年) 8月にザンビア大 学のルーク・ムンバ副学長 (Vice Chancellor: 日本における学長に相 当) が本学を訪問した際に、教育・研 究交流活動において良い協力関係を推 進するため、本会議の開催が提案され ました。本学からは、国際連携機構の 川野辺創副機構長, 人獣共通感染症リ サーチセンター長の鈴木定彦教授、獣 医学研究院の中山翔太助教. アフリカ ルサカオフィスの奥村正裕所長, 中村 聡特任講師, 成澤徳子特任助教, 国際 部国際連携課の齋藤幸義課長及び安高

由香利特定専門職員が参加しました。

開会にあたり、まずエナラ・ムワセ 副学長補(Deputy Vice Chancellor) により開会と歓迎の辞が述べられ、続 いて川野辺副機構長により本会合開催 の背景と趣旨が述べられました。この 後、協定締結後の交流活動に関して双 方から報告がなされました。本学から は、川野辺副機構長より、ザンビア大 学との学生及び研究者交流, 研究活動 の概要が述べられ、具体的な事例とし て鈴木教授から同センター・ザンビア 研究拠点の研究活動について, 中山助 教から本学の獣医学研究院, 工学研究 院など複数の部局で取り組む地球規模 課題対応国際科学技術協力プログラム (SATREPS) の研究活動について、 それぞれ報告がなされました。鈴木教 授からは, 両大学の研究協力活動の成 果として、80を超える国際論文が披露 され、両大学の研究能力の向上だけで なく. 対象専門分野への多大な貢献が 紹介されました。ザンビア大学側から は、パトリシア・サカラ国際交流部長 による同大学における国内外の関係機 関との学術・学生交流の現状について の説明に続いて、キング・ナルバンバ 獣医学部長より、獣医学部建設以降の 本学との連携・協力について報告がな



冒頭挨拶を行う川野辺副機構長

されました。ナルバンバ学部長から は、こうした両大学の連携により診断 技術の向上や研究活動・人材交流の活 性化が成果として上げられる一方、研 究対象とする疾患の範囲の拡大やコ ミュニティレベルでの成果の社会実装 が今後の課題として述べられました。 両大学の報告を受け、ムワセ副学長補 の司会のもと両大学の連携に関する今 後の展望について議論がなされまし た。今回のレビュー会合ではザンビア 大学全学部の国際交流担当者に呼びか けが行われたこともあり、これまで交 流の深い獣医学、工学分野のみなら ず、社会科学系の分野への連携の拡大 についても提案があり、 両大学関係者 の研究関心を踏まえながら模索してい くことが協議されました。

最後に本学アンバサダーであるヴィ クター・ズル獣医学部講師により. 閉 会の辞として両大学の交流の一層の充 実に期待が述べられました。本学は. 引き続きザンビア大学とのより充実し た学術・学生交流を図っていく予定で

(国際連携機構)

人材育成本部上級人材育成ステーションS-cubicで 第38回「赤い糸会&緑の会」を開催

人材育成本部のS-cubicでは、2月 5日(火)に八芳園(東京都港区)に て第38回(本年度第4回)「赤い糸会 &緑の会」を開催しました。

本会は、企業と若手研究者(DC. PD) との直接情報交換会であり、企 業には若手研究者の高い専門性や総合 力を理解いただき, 若手研究者には企 業の研究開発活動や企業における博士 の活躍状況等を知ってもらうことで, 相互理解を深め、視野の複線化、活躍 フィールドの拡大を図ることを目的と しています。

今回で「赤い糸会&緑の会」は通算 38回目の開催となり、若手研究者の参 加も回を重ねるにつれ増加し、11部局 から38名 (DC36名、PD2名) が参加。 また、平成26年度末より採択された科 学技術人材育成のコンソーシアムの構 築事業で、他大学から若手研究者8名 (東北大学2名, 大阪大学2名, お茶 の水女子大学1名, 横浜国立大学1 名,兵庫県立大学2名)も参加しまし

た。企業からは、総勢71名(各種業界 20社 (57名), オブザーバ企業1社, オブザーバ大学6校)にご参加いただ きました。

本会では、冒頭の人材育成本部副本 部長の伴戸久徳農学研究院教授による 開会挨拶, 赤い糸会担当の樋口直樹特 任教授による趣旨説明の後、参加企業 の皆様から業界動向や博士の活躍状況 等の紹介が行われ、その後、若手研究 者の自己紹介ポスター発表。企業ブー スを訪問しての個別情報交換等が活発 に行われました。さらには、この「赤 い糸会&緑の会」等を通じて企業に就 職した若手研究者の先輩方が今回の企 業説明会に5名参加し、後輩達に対し て熱い思いを語ってくれました。

開催後の企業側のコメントからも. 「オペレーションと目的意識が参加者 に浸透しているので、有意義な会だと 思う」「幅広い研究者とコンタクトで き, 非常に有用」との声をいただきま した。また、参加した若手研究者から

は、「企業とコンタクトして、会社に ついて色々詳しくわかりました。自分 のプレゼンター能力も高くなりまし た」「異分野でも研究の姿勢の評価を してくれる企業が多いことを知れた し、他のDCと交流を持てた」といっ た嬉しい声も聞かれました。

人材育成本部では上記の活動に加え て,企業事業所視察, Advanced COSA, J-window, キャリアパス多様化支援 セミナー. キャリアマネジメントセミ ナー,企業での長期インターンシップ 等を通して, これまで以上に若手研究 者の実践力を高めることへ注力して参 ります。また、コンソーシアム結成に より、東北大学や名古屋大学等が運営 している. より多くの洗練されたプロ グラムも博士達に活用されています。

興味のある方は人材育成本部のホー ムページを是非ご覧ください。

♦ http://www2.synfoster.hokudai.ac.jp

(人材育成本部)



伴戸人材育成本部副本部長の開会挨拶



樋口人材育成本部特任教授の趣旨説明



企業からの業界動向説明



説明に聞き入る若手研究者



若手研究者のポスター発表



企業との個別情報交換

海外サイトビジット (シリコンバレー) を実施

人材育成本部上級人材育成ステー ション (S-cubic) 及び国際人材育成 プログラム (I-HoP) では、13年以上 にわたって築き上げてきた博士人材 キャリア構築支援プラットフォームの グローバル化に取り組んでいますが. このたび日本人と外国人博士課程学生 合計5名がシリコンバレーの企業研究 所などを訪問し, 英語で研究紹介を行 うイベント「海外サイトビジット」を 実施しました。

昨年10月に本プログラムの実施説明 会を開催(約30名が参加)し、公募を 行った結果、18名の応募がありまし た。英語で記載された公募書類を所属 部局や国籍、性別等が分からないよう 匿名にした状態で外部機関に評価を委 託した結果, 日本人1名, 外国人4名 (男性3名,女性2名)が選ばれまし

出発に先立ち、学生達は各自の研究 紹介の英語プレゼンテーション演習, 日本人アントレプレナーによるレク チャーなどを受け、2月10日(日)に

羽田経由サンフランシスコに到着しま した。

1 日目は富士フィルムのオープンイ ノベーションハブとドイツ企業SAP (スタンフォード大のDスクール生み の親)を訪問し、各自の研究概要や事 業計画を発表しました。さらに、夜は 起業家のメンターとなっているベン チャー投資家による講話を聞きまし

2日目は、午前中にNECの新事業 発掘拠点NEC-Xを訪問し、午後には 各自が事前に面談の手続きをしてい た, スタンフォード大学及びUCバー クレーの研究室をそれぞれが別行動で 訪問しました。参加学生の数名は、訪 問先研究室の学生を相手に研究概要の 紹介プレゼンテーションも実施しまし た。

3日目の午前中は、新規に起業を目 指すベンチャーの立ち上がりを支援す る「アクセラレーター」と呼ばれる拠 点の一つ, Plug and Playを訪問し, 新しい事業の種を探す企業、アントレ

プレナー育成に注力する大学. そし て, 実際に起業し始めて出資者を探す ベンチャー企業家やそれを支援するメ ンター達が創り出している、シリコン バレーならではの人的交流の場を体験 してもらいました。午後は、富士ゼ ロックス系列の新規事業開発拠点FX Palo Alto Laboratory, Inc.を訪問し, 研究概要の紹介を行いましたが、この 研究所では先端的な研究を行う社員の 多くが博士号保有者で, その点でも学 生たちが刺激を受けたようです。

人材育成本部では、日本人及び外国 人博士課程学生やポスドクに, 起業ま で含めた多様なキャリアパスの可能性 を理解いただくとともに, 海外の大 学,研究機関や企業との連携や共同研 究につながることを期待して, この海 外サイトビジットを企画、運営して参 ります。

(人材育成本部)



富士フィルム オープンイノベーションハブ



宿泊ホテル集会所でのメンターによる講義



Plug and Playの壁に掲示されたベンチャー企業のロゴ

本学技術職員が分子科学研究所技術研究会にて報告

2月8日(金)に名古屋市にある自 然科学研究機構岡崎コンファレンスセ ンターにおいて開催された第20回分子 科学研究所技術研究会に, 武井将志技 術専門職員(電子科学研究所 兼創成 研究機構グローバルファシリティセン ター試作ソリューション部門副部門 長)がパネリストとして招待され、登 壇しました。

20回目を迎えた今年の研究会では、 まず, 武井技術専門職員, 高エネル ギー加速器研究機構の保住弥紹氏、北 陸先端大学院大学の宇野宗則氏, 宇宙 航空研究開発機構 (JAXA) の中坪俊 一氏、名古屋大学の立花健二氏らのパ ネリストから、「教育研究を支える先 進工作室の姿と技術の継承」をテーマ に. 各機関の取り組み・現状の紹介が 行われました。武井技術専門職員は, 試作ソリューション部門*の取り組み について、参画している理由や、技術 職員の強み・存在価値をどう高める か, 実効性のある技術向上や継承の場 をいかに作り上げているかを紹介しま した。約100名の参加者は熱心に耳を 傾け, 質疑応答の際は, 多くの質問が 寄せられるとともに、大学技術職員の 活性化を促す取組みに対して、高い評 価をいただきました。

その後のフリーディスカッションで は、教育研究を支える大学研究機関の 工作室の将来像, 人材育成とこれから の技術職員像について、それぞれの立 場・視点から活発な議論が交わされま した。国立大学としては初めての取組 みである試作ソリューションでの活動 が、新しい技術職員像の好例として意 見を求められるなど、参加者からの興 味の高さがうかがわれました。

試作ソリューション部門は、これか らも学内外の研究教育の強化・推進に

貢献すべく,挑戦していきます。

**試作ソリューション部門

グローバルファシリティセンターが、本学 の技術職員が持つ最先端の工作技術やノウ ハウを広く社会に還元する(主に学外の ユーザーに提供) 仕組みを構築。主に学外 の研究者に、機械工作・ガラス工作・薄片 技術の3つの技術を提供している。工作系 技術職員が、部局の枠を超えて主体的に協 働することができる場となっている。

◆試作ソリューション部門 http://www.shisaku.com/hokudai/

(創成研究機構)



技術職員の存在意義について講演する武井技術 専門職員



質疑応答の様子

高等教育研修センターにて研修会を開催

高等教育推進機構高等教育研修センターでは、1~2月に以下のとおり研修会を開催しました。

(高等教育推進機構)

英文Eメールライティング研修 参加者:37名

開催日:①初級編 1月11日(金)

②中級編 1月12日 (土)

開催場所:情報教育館4階共用多目的教室(2)

開催概要:英文Eメールを素早く効率的に書くための実践的スキルを身につける

ための研修会。初級編は文章のフォーマル度をコントロールする方 法、依頼表現の丁寧度をコントロールするコツなどを、中級編では 「検討する」「対応する」など英訳しにくい日本語表現の適切な英

訳、明快な拒否表現など英語文化のおすすめ表現の使用法などを学ん

だ。



英文Eメールライティング研修

アカデミック・ライティング研修 参加者:20名

開催日:①中級編 1月25日(金)

②上級編 1月26日 (土)

開催場所:情報教育館3階スタジオ型研修室

開催概要:英語による論文執筆に必要なライティング力を身につけるための研修

会。中級編は、アカデミックな接続詞の使い方、パラグラフの構成と 書き方、パラフレージングのコツなどを、上級編は可算名詞と不可算 名詞の意味の違い、数字の範囲の表現、日本語と英語の単語レベルの

意味のズレなどを学んだ。



アカデミック・ライティング研修

ワークショップ「英語でシラバスを作成する」 参加者:11名

開催日:2月1日(金)

開催場所:情報教育館3階スタジオ型研修室

開催概要:国際社会で通用するシラバスの書き方を学ぶための研修会。日本語で

書いた自分のシラバスを英語にするとき、どのような書き方をすれば

良いのかについて実践しながら学んだ。



ワークショップ「英語でシラバスを作成する」

英語プレゼンテーション研修(中級編) 参加者:6名

開催日:2月12日(火)~13日(水)

開催場所:情報教育館3階スタジオ型研修室

開催概要:国際学会等で研究内容を聴衆に伝えるための発表方法について、2日

間の集中セミナーで学んだ。英語でのプレゼンテーション技術を磨く

ための研修会。



英語プレゼンテーション研修(中級編)

英語コミュニケーション研修 参加者:54名

開催日:①リスニング編 2月15日(金)

②スピーキング編 2月16日(土)

開催場所:情報教育館3階スタジオ型研修室

開催概要:英語でのコミュニケーション力を向上させることを目的とした研修

会。リスニング研修では、英語を英語で理解できるようになるための トレーニングと自己学習法の習得を目的とし、リスニング力の向上 を。スピーキング研修では、「何を話すか」「どう話すか」を同時に行 うことができるようになるためのトレーニングを行い、スピーキング

力の向上を目指した。



英語コミュニケーション研修

ワークショップ「アクティブラーニングに学生を没頭させる」Workshop on Engaging students with Active Learning (Intermediate level) 参加者:8名

開催日:2月18日(月)

開催場所:情報教育館3階スタジオ型研修室

開催概要:アクティブラーニングの基本概念を既に理解している方を対象とし、

さらに発展的な協働学習とグループワークの方法について学ぶことを 目的とした研修会。加えて、アクティブラーニングを適切に授業に組

み込む学習活動についても考えた。



-クショップ「アクティブラーニングに学生を 没頭させる」Workshop on Engaging students with Active Learning (Intermediate level)

ルーブリック評価作成ワークショップ(入門編) 参加者:14名

開催日:2月18日(月)

開催場所:情報教育館3階スタジオ型研修室

開催概要:授業計画を立てるための目標設定, 目標到達へと導くための評価方法

を学び、講師や他の参加者からのフィードバックを受けながら、自分

のシラバスをブラッシュアップすることを目的とした研修会。



ルーブリック評価作成ワークショップ(入門編)

ワークショップ「教職協働で教育の質保証を実質化する」 参加者:13名

開催日:2月22日(金)

開催場所:情報教育館3階スタジオ型研修室

開催概要:教育の質保証という課題に対し、教職協働でどのように取り組んでい

けば良いのかについて考えるためのワークショップ。参加大学同士の 情報共有等を通じ、所属大学の課題を見つけ出し、解決に向けた具体

的な行動計画を講師と一緒に考えた。



ワークショップ「教職協働で教育の質保証を実 質化する

研修会「大学におけるカルト対策」 参加者:38名

開催日:2月23日(土)

開催場所:情報教育館3階スタジオ型研修室

開催概要:最近のカルト団体の実情と具体的な対応方法について学ぶための研修

会。オウム真理教=アレフの勧誘、学生の被害状況についても言及

し、注意を呼びかけた。



研修会「大学におけるカルト対策」

第二農場及び植物園の建築物が耐震改修優秀建築賞を受賞

本学第二農場と植物園の建築群の耐 震改修事業が,一般財団法人日本建築 防災協会の「平成30年度(第8回)耐 震改修優秀建築・貢献者表彰」におい て「耐震改修優秀建築賞」を受賞しま

同賞は、優れた耐震改修を実施した 建築物と, その耐震改修に主体的に係 わった関係者が表彰されるもので、建 築物としては,「農学部第二農場」及 び「農学部植物園・博物館」として国 の重要文化財に指定されている建築群 18棟が受賞しました。また、関係者と しては、本学のほか、平成25年度及び 26年度に実施した文部科学省国立大学 法人施設整備補助事業による耐震改修 の際、設計を担当した公益財団法人文 化財建造物保存技術協会, 有限会社金 箱構造設計事務所及び株式会社日建設 計と, 施工を担当した清水・高橋組特 定建設工事共同企業体が受賞しまし た。

今回の受賞にあたっては、本学が、 かねてからキャンパスマスタープラン に基づいて歴史的建造物の中長期的維 持管理体制の整備に取り組んでおり, 継続的に、建築専門家だけでなく植物 生態系管理, 埋蔵文化財管理, 史学を 含めた多角的視点から活用を検討して きたこと等が評価されました。なお. 国立大学法人の施設からの受賞は、京 都大学百周年時計台記念館(平成27年

度(第5回)受賞)に続く2例目とな ります。

表彰式は、2月19日(火)に霞が関 ビルにある東海大学交友会館で行われ ました。代表として, 本学総長補佐



受賞した主な建築物(第二農場牧牛舎)

(施設・環境計画室) の小澤丈夫教授 が表彰状を受け取り、受賞者によるプ レゼンテーションも行いました。

(サステイナブルキャンパスマネジメント本部)



受賞した主な建築物(植物園博物館本館)



表彰状の授与





小澤総長補佐によるプレゼンテーション



■部局ニュース

保健科学研究院が室蘭市と連携協定を締結

保健科学研究院及び室蘭市は、生活 習慣病予防や医療費分析の研究成果を 室蘭市に還元し、室蘭市民の健康増進 に貢献するとともに、新たな保健科学 研究を室蘭市民と一緒に推進するため に、2月7日(木)に連携協定を締結 しました。

当日は、室蘭市役所で協定の調印式が行われ、保健科学研究院の齋藤 健研究院長、室蘭市の青山 剛市長が協定書に署名しました。調印式では、青山市長が「市民の健康増進に北大のノウハウと知見を活かしたい」と抱負を述べられ、齋藤研究院長からは「本研究院で培った様々な技術を地域での健康課題の解決に役立てたい」と発言がありました。室蘭市との連携において

も、室蘭市の医療費データの分析をは じめとして、地域の健康課題の解決に 向けて様々な研究を行い、その研究成 果をもとに、室蘭市の各種健康施策の 企画立案に協力していくことを目指し ています。

本研究院は積極的に産学官地域連携



連携協定調印式でコメントを述べる齋藤研究院長

を進めており、市町村との連携協定は 岩見沢市、札幌市北区と次いで3件目 となります。今後ますますの保健科学 の教育・研究と地域貢献の推進が期待 されます。

(保健科学院・保健科学研究院)



調印後の齋藤研究院長(左)と青山室蘭市長(右)

低温科学研究所がリスボン新大学化学及び生物技術研究所と 部局間交流協定を締結

低温科学研究所は,2月5日(火) にリスボン新大学化学及び生物技術研 究所と部局間交流協定を締結し,調印 式を行いました。

調印式はリスボン新大学化学及び生物技術研究所で執り行われ、同研究所からClaudio M. Soares所長ら3名、本

研究所からは福井 学所長ら3名が出 席しました。

リスボン新大学は1973年に設立された大学で、9つの学部・研究所等から構成されており、リスボンにある公立大学のなかで最も新しい大学です。今回の協定については、本研究所との共

同研究をさらに発展させることを期待 し、取り交わされました。

調印式の後には互いの研究状況に関する活発な意見交換が行われ、さらなる積極的な交流連携が期待されます。

(低温科学研究所)



協定書を取り交わすCláudio M. Soares所長(右)と福井所長(左)



関係者集合写真

「データサイエンス公開シンポジウム」 を開催

数理・データサイエンス教育研究セ ンターでは2月19日 (火), 工学部に て「データサイエンス公開シンポジウ ム」を開催しました。これは、本学が 取り組むデータサイエンス教育及び人 材育成について紹介するとともに、文 部科学省が所管する数理・データサイ エンス関連事業や今後の政策について 情報共有することを目的としたもので す。

シンポジウムは4つのセッションで 構成し、セッション①は「データサイ エンス教育研究の取組み」と題して, 工学部B11講義室にて, 長谷山美紀セ ンター長をはじめとする当センターの 教員3名から、本学におけるデータサ イエンス教育・人材育成について概要 を説明しました。セッション②は、石 川雄章特任教授(東京大学)を座長に お迎えし、文部科学省データ関連人材 育成事業 (D-DRIVE) セッションと 位置付けて、引き続きB11講義室にて 開催しました。冒頭にて、文部科学省 科学技術・学術政策局人材政策課から 話題提供をいただき開始したこのセッ ションでは, 産官学による人材育成に ついて、3件の講演とパネルディス カッションが行われました。株式会社 日立製作所基礎研究センター シニア プロジェクトマネージャーであり、北 海道大学COI「食と健康の達人」拠点 プロジェクトリーダーを務める吉野正 則氏より, 産学連携の先行事例につい て講演いただきました。続いて、 D-DRIVEにおけるインフラ維持管理 分野のコンソーシアム参画企業とし て, 東日本高速道路株式会社の水口和 之氏、及び東京地下鉄株式会社の今泉 直也氏より講演いただいた後. 石川座 長と登壇者3名によるパネルディス カッションが行われ、各企業における

データサイエンス活用事例について幅 広い議論が交わされました。

休憩をはさみ、午後からは工学部オー プンホールにて, 科学技術政策の決定 に関わってこられた宮城大学の川上伸 昭学長による招待特別講演「Society 5.0-この政策の形成とこれから-政 策分析への話題提供 - 」が行われ、 データサイエンスにより拓かれる未 来 "Society5.0" 策定の経緯や、今後 の科学技術活動の新しい潮流となる "Open Science" について等. 貴重な 講演をいただきました。その後、引き 続きパネルセッションとして, 数理・ データサイエンス教育強化拠点コン ソーシアムの教育用データベース分科 会が主催するセッションとして, コン ソーシアムを形成する6大学の同分科 会委員に加え, カリキュラム分科会か ら丸山祐造教授 (東京大学), 教材分 科会から朝倉暢彦特任講師(大阪大 学) が登壇され、各分科会の立場から の意見や、各大学での事例や課題を交

えながら、データサイエンス教育用の データ選定や整理方法等について討論 が行われました。終わりに, 文部科学 省高等教育局専門教育課から、AI戦 略の策定に向けた政府の動向等につい てご紹介いただき、本セッションは終 了し、当該シンポジウムの閉幕となり ました。

シンポジウムには、全国の大学や企 業、自治体等から160名以上の方々に ご出席いただき,盛会の内に終了いた しました。今後、このシンポジウムで 得た知見や交わされた意見等が、わが 国の数理・データサイエンスに関する 教育・人材育成の発展に繋がっていく ことが期待されます。

当センターでは, 今後もこのような 場を設け、数理・データサイエンスに 関する情報の発信を継続的に実施して まいります。

(数理・データサイエンス教育研究センター)



開催趣旨を説明する長谷山センター長



講演を行う川上学長





パネルディスカッションの様子

2019年度薬学実務実習開始セレモニーを挙行

薬学部では、2月19日(火)に2019年度薬学実務実習開始セレモニー「臨床現場へあがるための心得」を挙行しました。

この式は、薬学科学生が実務実習 (病院実習・薬局実習)に臨むにあた り毎年実施しているもので、学生は、 実習中のユニフォームとなる真新しい 上下の白衣に身を包み、引き締まった 面持ちで参加していました。

式には,佐藤美洋薬学部長,松永茂

樹教務委員長、実務実習担当教員らが 出席し、実務実習の趣旨や学生に期待 すること、今年度実施された実務実習 を踏まえての注意点などとともに、激 励の言葉が伝えられました。

受入施設からは、北海道大学病院薬 剤部の井関 健薬剤部長、株式会社ア インファーマシーズの佐々木志織氏、 株式会社ツルハの高野紀子氏、株式会 社なの花北海道の井野千枝子氏が出席 し、臨床の現場・患者さんに直接接す る場で実習に臨む際の心構えなどが伝 えられ、学生たちが神妙に聞き入る様 子が見られました。

また、佐藤薬学部長から学生一人ひ とりへ実習中着用するネームプレート が手渡され、病院・薬局合わせて5か 月に及ぶ実習への壮行となりました。

(薬学部)



激励の言葉をかける井関薬剤部長



ネームプレートを手渡す佐藤学部長



熱心に聞き入る学生たち

平成30年度薬学研究院FD講演会を開催

2月20日(水), 臨床薬学講義室において, 平成30年度第2回薬学研究院FD講演会を開催しました。KDDI株式会社の浅見 洋氏をお招きして, SNSの正しい使用法に関する講義が行われました。

スマートフォン・ケータイを使う際、学生に起こりやすいトラブル事例とその防止策や対処法について、様々な具体例を挙げながら解説が行われました。講義は、「バカッターとは?」から始まりましたが、これは日本のインターネットにおいて誕生したTwitter利用者による行為の様相を表すインターネットスラングのことで、「火上後に東の手上機に存せいても思

「炎上後に事の重大性に気付いても既に手遅れとなる。たとえ、当該投稿を削除しても情報は半永久的に残り続けてしまう。第三者により個人情報が特定されてしまうと、誹謗中傷がネット

上に拡散し、本人や周辺の人の人生までも大きく変えてしまうことにもなりかねない」ということを説明いただきました。引き続き、デジタルタトゥー、フリーマーケット、リベンジポルノ、自殺願望サイト、等々の事例紹介が行われました。

終了後のアンケートでは、「スマホ 世代に潜む危険を実感することができ た」「子供が心配になる」「これまでの FDで一番良かった」「非常に面白かった」などの意見とともに、「被害があった時の対応について、もう少し知りたかった」という声もありました。

薬学研究院では、平成30年度においてFD講演会の出席率が75%を超え、目標値を大きく上回ることができました。

(薬学研究院)



講演する浅見先生



講師の説明を熱心に聞く参加者

先端生命科学研究院でFDSD研修会「総会2018」を開催

先端生命科学研究院では、2月12日 (火)に、理学部7号館310室にて平成30年度FDSD研修会「総会2018」を 開催しました。今年度も教育・研究担 当の全教員及び研究室の事務・技術職 員を対象とし、同研究院の諸研究・教 育活動報告とともに、理学・生命科学 事務部の業務報告も実施しました(出 席者総数70名(研究院等教職員41名、 事務部27名、他2名)。

プログラムは(1)第3期中期計画と研究・教育・教育支援環境,(2)持続可能な開発目標(SDGs)と科学技術イノベーション,(3)教えて!理学・生命科学事務部の活動の3部構成で行われました。プログラム(1)では、研究推進(GI-CoRE GSS活動、産学連携・産業創出部門、先端研究基盤共用促進事業、WPI)、教育改革(大学入学共通テストの英語認定試験、学部シラバスの英語化、IGPプログラム新規採択)、FD参加状況アンケート、

DP対応カリキュラムマップ, アセス メントポリシー策定などの他, 研究・ 教育環境, リスクマネジメント, サス ティナブル活動について今年度の主な 活動報告がありました。

プログラム(2)では12月6日(木)に主催した公開FD講演会「SDGs勉強会in北大vol.001」(北大時報1月号に掲載)の中から、日本学術振興機構経営企画部持続可能な社会推進室の講演録をビデオ上映しました。大学教育で求められるSDGsの取り組みの他、SDGs世界大学ランキングの公開予定などについて出村 誠先端生命科学研究院長から説明がありました。

プログラム(3)では、理学・生命 科学事務部の各担当業務への事前質問 を整理し、教務担当からは掲示板の分 類やデジタルサイネージの活用につい て紹介がありました。庶務関係では、 地震発生時緊急連絡体制について出村 研究院長から説明がありました。会計 関係では、グローバルファシリティセンターが管理する設備市場の利用方法について、同センター佐々木副センター長より説明いただきました。続いて、次世代物質生命科学研究センターの危険物保管庫の設置と利用説明会の予定などについて先端生命科学研究院の比能 洋教授から説明いただきました。最後に、門出副センター長から、今後の外国人留学生に向けた研究紹介のために、東南アジアの協定大学等の訪問計画も紹介されました。

研修会終了後には先端生命科学研究院と理学・生命科学事務部の意見交換会も行われ、今後の大学教育・研究環境の改善に教員と事務職員との協働意識を更に深めることができました。

◆開催概要ホームページ新着情報 https://life.sci.hokudai.ac.jp/fa/

(生命科学院・先端生命科学研究院)



会場の様子



出村研究院長



門出副研究院長



理学・生命科学事務部担当者からの説明



グローバルファシリティセンター佐々木副センター長



比能教授

「マネジメント、企業オーナーを目指す人のための企業財務会計入門編」を開催

2月7日(木), 工学研究院B31教 室において, アクゾノーベル株式会社 代表取締役社長の小池隆之氏による 「マネジメント,企業オーナーを目指 す人のための企業財務会計入門編」セ ミナーを開催しました。

最初に、増田隆夫工学研究院長か ら, 冒頭の挨拶及び講師紹介があり, 引き続き、小池氏から挨拶があった 後、財務諸表の作成の仕方や会社のマ ネジメントをテーマとした講演をして いただきました。

本セミナーでは、受講者が持ってい る身近な資産や, 店を開業し経営する 際の資産の流れを例に、 損益計算書や 貸借対照表を作成する等、実践を交え た講演が行われました。

本セミナーには、教職員及び学生40 名が参加し、活発な質疑応答が行わ れ, 財務会計の知識を習得するための 大変有意義な時間となりました。

(工学院・工学研究院・工学部)



挨拶をする増田研究院長



講演をする小池氏



質疑応答の様子



会場の様子

工学系部局で転倒防止活動への取組みを実施

工学系部局では、冬季間の転倒防止 対策として、滑り止め用の砂を入れた ペットボトルを材料・化学系棟正面玄 関及び材料・化学実験棟玄関に配置し ました。

この取組みは、学生及び教職員が路 面凍結により転倒しやすい状況となる ことがあるため, 玄関を利用する学生

及び教職員が砂を散布することで転倒 のリスクを軽減させるものです。

昨年の春頃から、使用後の500ml ペットボトル容器を水洗いし乾燥させ て準備し、秋頃、ペットボトル容器に 砂を詰め込む作業を行いました。

砂を入れたペットボトル容器の配置 期間は、11月から4月下旬までを予定 しており、その間、順次補給を行いま

工学系部局では, 今後も学生及び教 職員の安全衛生管理の向上を目指した 取組みを進めて行きます。

(工学研究院,情報科学研究科, 量子集積エレクトロニクス研究センター)



材料・化学系棟正面玄関前に砂を撒く増田隆夫 工学研究院長



材料・化学系棟正面玄関風除室の配備状況 (左:砂入りペットボトル,右:空ペットボトル回収ボックス)



滑り止め用の砂を入れたペットボトル

水産科学院・水産学部主催「業界研究セミナー」を開催

2月7日(木)・8日(金)に函館 国際ホテルにおいて, 函館キャンパス の学生向けに業界研究セミナーを開催 しました。本セミナーは、キャリア支 援の一環として, ブース形式で企業の 採用担当者と面談を行う機会を設け、 面接など本格的な選考過程に入る前に 企業等への理解を一層広げ深めてもら うことを目的として実施しています。

函館キャンパスの学生は、東京や札 幌等の主要な都市で行われている合同 企業説明会や就職活動セミナー等に参 加することが地理的・時間的に難し く,企業の皆様と直接対面し,コミュ ニケーションをとる今回のセミナーは 大変重要な機会となっています。

参加企業は, 日本水産株式会社, 森 永乳業株式会社, アサヒビール株式会 社をはじめとする食品製造及び水産系 の人気企業に加え, 大塚製薬株式会 社、大正製薬ホールディングスグルー プなどの大手製薬会社や, その他 IT, 流通, 小売, 官公庁など幅広い 業界にわたり、2日間で73社が参加し ました。

さらに, 就職情報会社による就職相 談コーナーも設けられ, 就職活動全般 の相談やエントリーシート添削等を希 望する学生の対応にあたっていまし た。

本セミナーは1回40分サイクルで、 1日8回までのスケジュールで組ま れ、企業ブースを訪問した学生は、こ れまでの企業研究を活かしながら集中 力を持続させ、真剣な眼差しで採用担 当者の声に耳を傾け、また積極的に採 用担当者へ質問をするなど、非常に熱

心な様子がうかがえました。

学生は, 限られた時間を上手に利用 し就職相談コーナーを利用するなど, 参加者はそれぞれの歩き方で本セミ ナーに参加していました。2日間で延 べ172名の学生が参加し、盛況のうち に終えることができました。

この取組みは、今後もキャリア支援 の一環として, より一層充実させた形 で継続していく予定です。

(水産科学院・水産科学研究院・水産学部)





採用担当者の声に耳を傾ける学生

平成30年度北海道大学北方生物圏フィールド科学センター 耕地圏・水圏ステーション技術職員専門研修を開催

北方生物圏フィールド科学センターでは、1月29日(火)~31日(木)に、平成30年度北海道大学北方生物圏フィールド科学センター耕地圏・水圏ステーション技術職員専門研修を開催しました。

この研修は、本学及び道内大学のフィールド系技術職員を対象に、職務に関する必要な専門的知識と技術等を広く修得させることを目的として開催したものです。今年度は「ICT(Information and Communication Technology:情報通信技術)」「畜産」をキーワードに、施設見学及び実演・意見交換会・講義を行い、24名(帯広畜産大学からの1名を含む)が参加しました。

初日は、技術職員5名の技術発表と 農学研究院の中島大賢助教による「道 内における子実トウモロコシの増収に 向けた試み」、水圏ステーション忍路 臨海実験所長の四ツ倉典滋准教授によ る「北大FSCにおけるコンブ研究」、 北海道石狩家畜保健衛生所の小川英仁 予防課長による「家畜の伝染病の発生 及びまん延防止対策について」、技術 支援本部総括技術長の上浦達哉技術専 門員による「技術職員組織化につい て」の講義が行われました。夜には懇 親会が行われ、帯広畜産大学からの受 講者や本センターの新入職員も参加し て,大いに親睦を深め,新たな人的 ネットワーク作りの機会ともなりまし た。

2日目午前は、学校法人酪農学園フィールド教育研究センター酪農生産ステーションを訪問し、牛舎やバイオガスプラントを見学しました。見学後には、同フィールド教育研究センター副センター長・高橋俊彦教授、同副センター長・森 志郎准教授及び技師の方々との意見交換会が行われました。朝晩の搾乳作業や分娩もある職場での

業務体制や同学園の技師と教員・学生との関わりについて聞くことができたほか、施設運営予算に関する現状、業務での工夫や努力と予算配分のバランスにおけるモチベーションの保ち方等について意見交換が行われました。受講者からは「初めて他大学の職員の職務体系や考え方に触れる機会を得て参考になった」「酪農学園は興味深かった。今後も国立大と類似した機関の見学がしたい」など、本研修が有意義だったとの声が多くありました。

午後は、ヤンマーアグリジャパン株式会社の北海道支社ヤンマーアグリソリューションセンターを訪問し、世界最大の農業機械メーカー Deere & Company社製のトラクタ及び作業機を国内法規に合致させるための改装を行う大型農機センターで、大型トラクタと自走式フォーレージハーベスタやコンバインなどの大型高性能作業機を見学した後、昨年10月から市販化されたヤンマー社製ロボットトラクタの講義と実演が行われました。受講者から



小川氏による講義



酪農学園での意見交換会

は「ロボット技術の進歩・発展・これ からの課題等,現状を知ることができ た」との感想がありました。

3日目は、ホクレン農業協同組合連合会資材事業本部の加藤真也氏と宮本豊誠氏による「担い手不足に対応した省力化を目的とする各種生産資材の動向について」、農学研究院の小山内信智特任教授による「地震と土砂災害」の講義が行われました。

本研修を通して、最新の研究等の情報を得るだけでなく、技術発表等により各施設での技術職員の業務内容についての相互理解や技術交流・親睦が深められました。開催にあたりご指導・ご協力をいただいた先生方、北海道石狩家畜保健衛生所、学校法人酪農学園、ヤンマーアグリジャパン株式会社北海道支社、ホクレン農業協同組合連合会の皆様、ご支援をいただいた事務担当者の方々に深くお礼申し上げます。

(北方生物圏フィールド科学センター)



酪農学園見学



ロボットトラクタの実演

「本は脳を育てる」図書展示を開催

平成30年11月21日 (水) ~平成31年 1月31日 (木) にかけて、附属図書館 (北図書館) において、「本は脳を育 てる:図書展示」を開催しました。

「本は脳を育てる:北大教員による 推薦図書」は、本学の教職員が学生の ために選んだ、「これ!」という図書 等を推薦コメントつきで紹介するサイト(https://www.lib.hokudai.ac.jp/ book/)です。「勉強以外でも、たく さん本を読んでおきたい!」「社会に 出る前に教養を身に付けたい!」など など、学生の『本探し』を支援しています。

今回の展示では、「本は脳を育てる」のサイトで公開中の約520点の資料のうち新着を中心に、159点を推薦者の熱のこもったコメントと共に展示しました。期間中100点が延べ281回貸し出され、展示スペースではコメント

に見入りながら本を選ぶ学生の姿が見 られました。

また、最近推薦された46冊について、書誌情報と推薦コメントを冊子にして配付したところ、大変好評でした。

「本は脳を育てる」では常時教職員

の推薦コメントを上記ウェブサイトに て受け付けています。学生に読んでほ しい, おすすめしたい, という図書等 がありましたらぜひご推薦ください。

(附属図書館)







配布した冊子の表紙

北大病院の医師が出演するラジオ番組が4月からスタート!

4月から、北大病院の医師が月替わりで出演するラジオ番組がスタートします。

わかもと製薬presents「ナルミッツ!!! 健康長生き北海道!」と題した5分間番組で、HBCラジオの平日午前ワイド番組「気分上昇ワイドナルミッツ!!!」内で放送されます

毎週火曜日の10時25分頃から, 月毎にテーマを決め1年間, 健康に関する話題を提供していきます。

2月8日(金)には,4月に病院長 に就任される腫瘍内科の秋田弘俊教授 が出演する4月放送分の収録が行われ、和やかな雰囲気のなか順調に収録を終えました。

4月は「がんの診断と治療」をテーマに、様々ながんの治療法について、わかりやすくお伝えします。また、北海道の「食」の話題を月に1度入れるようにし、がんの患者さんに積極的に食べてもらいたい食材・食品といった、日々の生活に役立つ身近なこともお話ししています。

radiko (ラジコ)*を利用して放送後 にも再生できますので, ぜひお聴きく ださい。

教授 北川 善政

**ラジオ番組を聴くことができるスマートフォン用のアプリ。道内エリアでは放送日から1週間,無料で聴くことが可能。

(北海道大学病院)



パーソナリティの石井麻子さんと秋田教授(右)

「ナルミッツ!!!健康長生き北海道!」※確定分 放送月 テーマ 出演者 4月 がんの診断と治療 腫瘍内科 教授 秋田 弘俊 5月 関節痛とリウマチ 内科Ⅱ 教授 渥美 達也 6月 病気としての肥満 消化器外科Ⅱ 教授 平野 聡

お口の健康と全身との関係 口腔内科

HBCラジオスタジオでの収録

7月

■ 定年退職を迎えるにあたって

本年3月31日限りで定年退職される方々のお言葉と略歴を紹介します。

文学研究科教授

たやま ただゆき 田山 忠行 氏



私は、平成5年に助教授になってからの26年間を北大の 古河講堂に研究教育の拠点を置かせていただきました。そ れ以前の学生時代と助手時代も合わせると40年もの長い年 月を北大キャンパスで過ごしてきました。専門領域は基礎 系の心理学で、感覚・知覚の研究、特に運動知覚と時間知 覚のメカニズムに関する様々な実験的研究を行ってきました。

私が助教授になった頃はまだ教養部がありましたので、最初の2年間は文学部と教養部の両方の教授会に出席しました。やがて平成7年に教養部が廃止され、文学部は大講座制に移行しました。その後、平成12年に大学院が重点化され、またこの4月には、文学研究科は文学研究院と文学院に移行する予定です。このように研究教育組織は短い時間サイクルでめまぐるしく変貌を遂げてきました。この変革がより良き方向に向かっていくことを期待しておりますが、同時に大学教員の仕事が益々大変になっていきそうであることを懸念しております。ですが、ある先生が退職時に「それはいつの時代も同じですよ」と言っておられましたので、これは単なる引き継がれた感覚かも知れません。

私の力不足により、本学に対して十分尽くしていないことは申し訳ない限りですが、私自身は平穏無事に幸せな研究生活を送ることができました。これはひとえに本学の教員・職員の皆様の支え、また向学心旺盛な学生諸君のおかげです。皆様には心より感謝申し上げます。

略歴

昭和54年3月 北海道大学文学部卒業

昭和56年3月 北海道大学大学院文学研究科修士課程修了

昭和58年3月 北海道大学大学院文学研究科博士後期課程中退

昭和58年4月 信州大学教育学部助手

昭和61年7月 北海道大学文学部助手

平成5年4月 北海道大学文学部助教授

平成12年4月 北海道大学大学院文学研究科助教授

平成15年3月 博士(文学)(北海道大学)

平成15年9月 北海道大学大学院文学研究科教授

文学研究科教授

千葉 惠 氏



北海道大学という豊かで寛容な組織に守られて研究. 教 育に従事することができました。制度に守られた外的に平 穏な日々の果実はと言えば、辞書を引きながら西洋古典文 献を楽しむことができるようになったという程度であるこ とは、いかにも本学ならびに学生諸君に申し訳なく思いま す。研究,教育と言っても事実上苦闘の日々でした。それ は人類が持ちえた最良質の頭脳アリストテレスと尋常なら ざるひとナザレのイエスを模範としたためか(!?), 自ら の認知的そして人格的力能のいたらなさ、無能さ、今日的 には「ゲスさ」をいやというほど知らしめられ、テクスト に埋もれつつ暗中模索の日々でした。とはいえこの北の大 地での歳月の流れのなかで、懐疑や自責が喜ばしい探求に 変容したことは幸いなことでした。ヨーロッパの哲学、神 学, 思想, 精神史にとって基礎的な「本質」, 「完成 (entelecheia)」そして「信」について自らの理解を持ち ました。「本質」理解が「千葉論文は古代研究者たちの注 目を集めた。・・ひとは「遂にやった」或いは「また[新説] か」(enfin ou encore une fois) と言うであろう」と評さ れたことを、本学への感謝の徴として記させていただきま す。残りの生涯はこれらが私だけの解であったのか. 人類 にとっても解であったのか、また解となるのかにチャレン ジすることに向けられます。ありがとうございました。

略歴

生年月日昭和30年1月27日

昭和52年3月 慶應義塾大学法学部政治学科卒業

昭和55年3月 慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程哲学専攻修了

昭和59年3月 慶應義塾大学大学院文学研究科後期博士課程哲学専攻単位修得退学

昭和59年4月 学校法人慶應義塾非常勤講師

昭和61年4月 オックスフォード大学哲学科大学認定学生

昭和63年6月 オックスフォード大学人文学科哲学科修士課程修了

平成2年2月 オックスフォード大学人文学科哲学科博士課程修了

平成2年4月 北海道大学文学部助教授

平成2年5月 哲学博士(オックスフォード大学)

平成12年4月 北海道大学大学院文学研究科助教授

平成17年3月 北海道大学大学院文学研究科教授

情報科学研究科教授 走位 氏 栗原



これまでの私の所属組織の名称は、世の流れを反映する ように、「電気」と「情報」の間を揺れ動きつつ情報へ向かっ たという感じです。昭和53年に電気工学科を卒業し、情報 工学専攻に進学, その後, 電気工学科に就職, その後, 新 設された情報工学科に配置換え。このころの情報工学科は, まだ存在していた電気工学科と「一体運営」しており、両 学科の学生を同じカリキュラムと同じ教員団で教育してい ました。その後、本学を退職して北海道工業大学(現:北 海道科学大学) で電気工学科に職を得て、その数年後の改 組で情報デザイン学科に配置換え。その後、本学に戻って システム情報工学専攻に所属, 数年後に情報科学研究科が 設立され、工学研究科からそちらに配置換えとなりました。

そうなると情報という名の付く組織名は当たり前となっ たので、それを差別化するために、その後、私の主導する 改組の際に、自分の担当する研究室名を「知能ソフトウェ ア」と改名しました。最近の人工知能ブームを見ると、こ の知能という名前さえ、今後は差別化する必要があるかも しれません。しかし、退職をきっかけに、今後は世の流れ に捕らわれず、じっくりとP + NP問題の解決にでも取り 組んでみたいものだと思うこの頃です。

略歴

生年月日昭和30年6月30日

昭和53年3月 北海道大学工学部卒業

昭和55年3月 北海道大学大学院工学研究科修士課程修了

昭和55年4月 北海道大学工学部助手

昭和61年6月 工学博士(北海道大学)

平成元年4月 北海道大学工学部講師

平成2年7月 北海道大学工学部助教授

平成8年4月 北海道工業大学教授

平成14年4月 北海道大学大学院工学研究科教授

平成16年4月 北海道大学大学院情報科学研究科教授

平成19年6月 北海道大学大学院情報科学研究科副研究科長平成22年3月

平成22年4月 平成26年3月 北海道大学大学院情報科学研究科長

情報科学研究科教授 庸夫 氏



NTT (入社時は電電公社でした) の研究所での22年間 の会社勤めを経て、平成16年4月に赴任して以来、早15年 の年月が過ぎました。初めての北海道での生活で、広々と した大地に感動はしましたが、赴任の最初の年は、大学で の事務処理などに慣れることと、研究経費を確保すること に忙殺されて、本州とは違った北海道の持つ独特な自然に 気がつきませんでした。次の年になり、遅い春が始まって の木々の緑とともにさまざまな花々が一斉に咲き誇る様子 や、北大内でも見られる秋の紅葉への変化など、1年遅れ で改めて感激したのを,ついこの間のように思い出します。 それにつけても、夏は天国。時々夏場に大阪や名古屋にし かたなく出張するたびに思い知らされ、最近その思いをさ らに強くするのは、温暖化だけではなく、私の体が北海道 仕様に変わってきていることもあるようです。

他大学も含めて、大学を取り巻く状況は厳しさを増して きている昨今ですが、本学が立地する環境を活かした取り 組みも重要になってきそうな気がします。

今後、1年間は特任教授として勤務させていただきます ので、よろしくお願いいたします。

略歴

生年月日昭和29年6月11日

昭和52年3月 東北大学工学部卒業

昭和54年3月 東北大学大学院工学研究科博士課程前期修了

昭和57年3月 東北大学大学院工学研究科博士後期課程修了

昭和57年3月 博士(工学)(東北大学)

昭和57年4月 平成16年3月 民間(日本電信電話株式会社)

平成16年4月 北海道大学大学院情報科学研究科教授

平成22年4月 平成26年3月 北海道大学大学院情報科学研究科副研究科長

地球環境科学研究院教授

甲山 隆司 E.



四半世紀のあいだ、大学院地球環境科学研究科(現在の 地球環境科学研究院)に籍をいただき、生態学の研究と教 育を続けてきました。生物の蓄積量でも回転速度でも最も 高い森林を相手に、なぜ同じ資源を利用する多くの樹種が 共存できるのか、という課題に興味を持って取り組んでき ました。フィールド科学は、北大の特色のひとつです。多 くの大学院生たちと長いあいだ行ってきた知床や阿寒の原 生林やボルネオの熱帯雨林での継続調査も、次世代にバト ンタッチして、これからはやり残した解析をやっていく予 定です。

地球環境科学研究科が設置されたのは、現在に至る気候 変動枠組み条約と生物多様性条約が提起されたリオの地球 サミット (1992年) の翌年でした。個々の興味本位の研究 を. 地球規模の環境課題の中に位置づけるという作業にも 携わるようになりました。世界科学会議の地球圏・生物圏 国際共同研究計画で科学委員を6年間務めたことも、今思 えば得がたい経験でした。

略歴

生 年 月 日 昭和29年10月30日 昭和53年3月 東京都立大学理学部生物学科卒業 昭和55年3月 京都大学大学院理学研究科修士課程修了 昭和57年4月 日本学術振興会大学院博士課程獎励研究員昭和58年3月 昭和58年3月 京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了 昭和58年3月 理学博士(京都大学) 昭和58年4月 京都大学大学院理学研究科研修員 昭和58年5月1日本学術振興会奨励研究員昭和60年3月

昭和60年4月 鹿児島大学教育学部講師 昭和62年4月 鹿児島大学教育学部助教授

平成3年5月 京都大学生態学研究センター助教授

平成3年8月7 -ケンブリッジ大学植物学科客員研究員

平成4年3月 平成6年10月 北海道大学大学院地球環境科学研究科教授

平成10年9月7

・パンサックフーハーバード大学集団進化生物学科Bullard Fellow 平成11年7月

平成17年4月 北海道大学大学院地球環境科学研究院教授

地球環境科学研究院教授

長谷部 文雄 K.



この歳まで大病を患うこともなく大学を職場として過ご すことができた日々に、まずは感謝しています。思い起こ してみれば、あのとき、もし…、という偶然がいくつもあ りました。北大・地球環境に職を得ることができたのも然 り。研究活動としては、南極オゾンホールの「見逃し」を 手始めに、いくつものチャンスを活かせなかった無念さを 禁じえませんが、博士課程3年での学位取得が最優先では なかった時代を生き、発見の喜びに研究の原点を感じるこ とのできたのは幸せでした。大学における研究は如何にあ るべきかという問いは忘れ去られ、放っておいても好きな 研究に打ち込む研究者の主体性を信じられずに「『生産性』 が低い」と公言する財務省トップ官僚。研究費と論文数と の費用対効果で教育・研究の価値が語られる時代に、 ゆと り世代の学生が研究職に魅力を感じないのは無理もありま せん。研究はビジネス化し、「手っ取り早く論文にするな らテーマはこれ!」と教えてくれる人工知能を駆使するこ とが「研究者」の要件になるような予感が?何に生かすか を自ら判断し組織から独立した形で何らかの研究活動を続 けるのを夢に、もうひと頑張りしたいと思います。ありが とうございました。

略歴

生 年 月 日 昭和29年11月1日 昭和52年3月 京都大学理学部卒業 昭和54年3月 京都大学大学院理学研究科修士課程修了 昭和58年3月 京都大学大学院理学研究科博士後期課程単位修得退学 昭和58年4月 日本学術振興会奨励研究員 昭和58年4月 京都大学理学部研修員 昭和59年1月 理学博士(京都大学) 平成3年1月 ニューヨーク州立大学ストーニーブルック校地球惑星大気研究所研究員 平成5年6月 米国航空宇宙局ゴダード宇宙飛行センター研究員 平成6年1月 茨城大学理学部助教授 平成14年4月 北海道大学大学院地球環境科学研究科教授

平成17年4月 北海道大学大学院地球環境科学研究院教授

地球環境科学研究院教授 松田 冬彦 氏



私は昭和49年に北大理類に入学し、理学部化学科に進学 して大学院まで進みました。平成元年に理学部化学科助手. 平成7年に地球環境科学研究科助教授に採用され現在に至 ります。大学院在学中から天然有機化合物(天然物)の有 機合成に関わる研究に一貫して携わってきました。天然物 とは生物が生産する比較的低分子量の有機化合物のことを 言います。地球上では多様な生物が相互に関わり生態系が 保たれていますが、天然物が生物間の相互作用を司る場合 が少なくありません。天然物は極微量で作用を示すことが 多く, 作用を解明するためには人工的に作ること(有機合 成)が必要になります。有機合成では色々な化学反応を用 いて有機分子を作りますが、天然物の場合、その分子構造 の複雑さゆえ注意深く化学反応を選択しないと目的の有機 分子を作ることができず、大変根気のいる研究です。私は 自分の興味の赴くまま様々な天然物の有機合成に取り組む ことができ、楽しい研究生活を送らせていただきました。 ひとえに教職員の皆様のご支援と多数の学生諸君の努力の 賜物と感謝しております。私はこの4月から再雇用を希望 しており、特任教授としてしばらく研究教育に携わらせい ただきたいと思っております。今後ともよろしくお願い申 し上げます。

略 歴

生年月日昭和30年2月5日昭和53年3月北海道大学理学部化学科卒業昭和55年3月北海道大学大学院理学研究科修士課程修了昭和58年6月北海道大学大学院理学研究科博士後期課程単位修得退学昭和58年7月日本学術振興会奨励研究員昭和59年3月日本学術振興会奨励研究員昭和59年3月日本学術振興会奨励研究員昭和59年9月理学博士(北海道大学)平成元年4月北海道大学理学部助手平成5年5月北海道大学理学部助手平成5年5月北海道大学理学部講師北海道大学大学院理学研究科助教授平成10年4月北海道大学大学院地球環境科学研究科助教授

平成12年10月 北海道大学大学院地球環境科学研究科教授 平成17年4月 北海道大学大学院地球環境科学研究院教授 平成29年10月 平成31年3月 北海道大学大学院地球環境科学研究院副研究院長



北大には平成17年に広大から転任し、14年間お世話に なった。私は地質学を専門とするが、北大着任早々、全学 教育のプロジェクトでイギリスの名門ケンブリッジ大学に 初習地学教育の視察、翌年には大学院GP「魅力ある大学 院教育」でアルゼンチンの地質巡検旅行を実施させていた だくなど、旧帝大ならではの恩恵に預かった。しかし、当 初目論んでいた北大で多数の博士を輩出することに関して は、平成21年に最初の博士を出せたものの(この学生は後 に大学の准教授の職を得た). 学生をなかなか獲得出来ず. 平成28年になってやっと2人目の博士を出すことが出来 た。しかし、最近になって留学生や社会人博士課程の学生 が来るようになり、現在までに合計4名の学生に博士の学 位を与えた。研究面でも、北大に来て数年間は研究を大き く展開出来ず、北海道に研究フィールドを移してから研究 が軌道に乗って来た。さらに、平成26-30年度に新学術領 域研究「地殻ダイナミクス」が採択され、ライフワークで あった中央構造線の研究を退職間際に完結出来たことは望 外の喜びである。このように、元来不器用な性格のため取 り付きは遅かったが、北大での研究を十分楽しむことが出 来た。

略歴

生年月日昭和30年9月15日昭和53年3月東北大学理学部卒業昭和55年3月東北大学大学院理学研究科博士課程前期修了昭和62年5月カリフォルニア大学バークレイ校地質大学院修了昭和62年12月Ph.D.(カリフォルニア大学バークレイ校)平成元年5月愛媛大学理学部助手平成2年10月愛媛大学理学部助教授平成5年4月広島大学理学部助教授平成8年4月広島大学理学部教授平成8年4月広島大学理学部教授平成17年4月北海道大学大学院理学研究科教授

平成18年4月 北海道大学大学院理学研究院教授

理学研究院教授 おいかわ ひろあき 相川 弘明 氏



学習院大学を皮切りに、いくつかの大学を経て、平成17年10月に理学研究科に赴任いたしました。研究・教育に夢中になっているうちに、気がつけば、北海道大学が最も長く勤務した大学となり、札幌が最も長く住んだ街になりました。都心にありながら自然にあふれた広大なキャンパスの中で研究・教育を続けてこられたことは大きな喜びです。それにも増して、豊かな蔵書、優秀な教職員、熱心な学生に囲まれた環境は数学研究に理想的なものでした。ゆったりとした時間の中で自分の研究を深め、長編論文や図書を出版できましたことを誠に有り難く思っています。

後半の数年間は数学部門の就職担当として学生・院生諸君のキャリア形成のお手伝いをさせて頂きました。産官学の主要部門に数学出身者が進出していくことを大変心強く思います。数学で民間企業に行くことは少ないというのは昔のイメージで、現在ではいろんな方面から数学の求人が多くあります。数学出身者の斬新な感覚が求められていると言うことでしょう。

最後になりましたが、お世話になった皆様に心から感謝 申し上げるとともに、北海道大学のますますの発展を祈念 いたします。

略歴

昭和53年3月 京都大学理学部卒業

昭和55年3月 広島大学大学院理学研究科博士課程前期修了

昭和55年4月 学習院大学理学部助手

昭和61年12月 理学博士(学習院大学)

昭和63年4月 群馬大学工学部講師

平成2年4月 群馬大学工学部助教授

平成4年4月 熊本大学理学部助教授

平成7年10月 島根大学総合理工学部教授

平成17年10月 北海道大学大学院理学研究科教授

平成18年4月 北海道大学大学院理学研究院教授

理学研究院教授

武田 定氏



「光陰矢の如し」という言葉が思い浮かびます。本来は、時間を過ごす前に心にとめておくべき言葉なので不適切かもしれません。その時々を無為にすごしたつもりはありませんが、北海道大学に赴任して以来の20年足らずの間を一言で表そうとしたとき、この言葉が思い浮かびました。2000年3月末に、北海道大学に赴任するために東京から飛行機に搭乗しようとしたとき、有珠山が噴火しました。風向きによっては新千歳空港に着陸できないとのアナウンスがありましたが、幸いなことに無事着陸することができ、一安心したことを覚えています。荷物が届くまでに一週間以上かかってしまいホテル暮らしを強いられました。

その後,順調に研究を立ち上げ,また授業も行うことができるようになりました。ご協力下さった教職員の方々や研究室の学生の方々に心より感謝申し上げます。

研究面では、私の独自の好奇心に基づいた研究を進めてきたため、苦労した学生さんもいたと思います。また、国内外の研究者の方々とも固体NMRの特長を生かして、物性研究分野で共同研究をさせていただきました。

授業では、受講生が興味を引かれるように私がよかれと思うやり方を通してきましたが、他の授業科目との連携をもっと深める努力をすべきだったのかもしれません。長年、教務委員を務めてきましたが、開講する授業科目の精査や実行教育課程表の見直しなどを行う必要性を感じています。Integrated Science Programの学生も含めて、長期的な視点で、変化していく学生気質と社会の要望への対応と研究教育で目指すこととのバランスをうまく取ることも重要と思いますので、次世代の教職員の方々に期待したいと思います。

長年、北海道大学おける教育研究を支えて下さった皆様 方に感謝し、お礼申し上げます。

略歴

生 年 月 日 昭和29年9月17日

昭和52年3月 静岡大学理学部卒業

昭和57年3月 大阪大学大学院理学研究科博士後期課程修了

昭和57年3月 理学博士(大阪大学)

昭和57年4月 大阪大学理学部技官

昭和58年4月 大阪大学理学部助手

平成8年4月 岡崎国立共同研究機構分子科学研究所助手

平成8年10月 群馬大学工学部助教授

平成12年4月 北海道大学大学院理学研究科教授

平成18年4月 北海道大学大学院理学研究院教授

薬学研究院教授 鈴木 利治 氏



研究者を育てる事を中心に過ごしてきました。目の前の 目標をいつまでにやるという研究ではなく、興味に沿った 研究が遠回りでも独創的な研究に結びつき、結果として当 初の目標に別の角度から切り込めるとなるように努力して きました。そういう意味で、私は若い人には、いつまでに これをやれという具体的な指示は出さないように心がけ、 素材のテーマを自分なりに調理してゆく環境を与えて来ま した。私の研究成果も大部分が若い人の自由発想から生ま れてきた果実です。私の業績として認識されている研究成 果も頑張った若い研究者(の卵)の結晶です。ピペットマ ンを握らなくなった教授って、研究者のなれの果てか!と 想う日々も多かったです。従って、私の研究室で研究を共 に行い,成果を挙げ、修士号、博士号を取得して巣立って 行った多くの若い研究者に感謝します。日本だけに留まら ず世界で活躍する教え子も多く、私よりもおおいに優れた 研究をして貰いたいと望んでいます。

最後に昨今の我が国の大学・大学院の現状は、目的達成 型研究が多くなり、教育でも成績の細分化が進み、おおら かさが無くなっているように感じます。次世代を担う研究 者が育つ環境なのかが気がかりです。

略歴

生年月日昭和31年2月13日 昭和54年3月 山形大学理学部卒業 昭和57年3月 名古屋大学大学院理学研究科博士課程前期課程修了 昭和60年3月 名古屋大学大学院理学研究科博士課程後期課程修了 昭和60年3月 理学博士(名古屋大学) 昭和60年4月 帝京大学薬学部助手 昭和60年11月 岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所発生生物学研究系助手 平成6年4月 東京大学大学院薬学系研究科助教授 平成13年3月 北海道大学大学院薬学研究科教授 平成18年4月 北海道大学大学院薬学研究院教授 平成24年4月 平成26年3月 北海道大学薬学部附属薬用植物園長

農学研究院教授 小泉 章夫 氏



北大農学部・大学院農学研究科に在学中、木材加工学講 座で、釘着重ね梁の変形と耐力の解析方法や樹木の構造力 学について学びました。大学院修了後の1987年、北海道教 育大学に赴任し, 中学校技術家庭科の教員養課程で木材加 工技術の習得と教育に励みました。在職中, 上越教育大学 で1年間、木材加工の教科教育法を実践的に学び、教師と 生徒のコミュニケーションにおける相互作用について考え ました。1995年に転職した秋田県の木材高度加工研究所で は充実した試験設備を使い、潤沢な研究費をいただいて、 秋田スギ材質の究明のほか、木ダボの挿入接着法による構 造材の接合法の開発と実用化に取り組みました。ご縁が あって、2000年秋に北海道大学の古巣の木材工学研究室に 戻ってきました。2004年9月の台風18号は北海道の森林や 緑化木に洞爺丸台風以来の風倒被害をもたらしましたが. これをきっかけに、樹木の風害防除に関係した研究を再開 しました。いつの間にか、北大に勤務した期間が一番長く なってしまいました。この間、皆さまに支えられて、樹木 から木造建築まで、木材の循環利用の各段階にかかわる研 究を行うことができた幸運に感謝しています。

略歴	
生 年 月 日	昭和30年11月26日
昭和56年3月	北海道大学農学部林産学科卒業
昭和59年3月	北海道大学大学院農学研究科修士課程修了
昭和62年3月	北海道大学大学院農学研究科博士後期課程修了
昭和62年4月	北海道教育大学教育学部札幌分校助手
昭和63年4月	北海道教育大学教育学部札幌分校講師
平成6年4月	北海道教育大学教育学部札幌分校助教授
平成7年4月	秋田県立農業短期大学附属木材高度加工研究所助教授
平成11年4月	秋田県立大学木材高度加工研究所助教授
平成12年10月	北海道大学大学院農学研究科助教授
平成18年4月	北海道大学大学院農学研究院助教授
平成19年4月	北海道大学大学院農学研究院准教授
平成27年7月	北海道大学大学院農学研究院教授

農学研究院教授

阿部 純 氏



農学部農学科を卒業後、大学院へと進み、博士課程終了 後に農学部の教員として採用され今日に至りました。学生 時代を通して46年の長い間、このキャンパスに通う生活を 送ってきたことになります。この間、北海道の主要畑作物 であるテンサイを皮切りに、ダイズを対象とした作物の遺 伝的多様性の成因や主要な農業形質の分子遺伝学的な研究 を進めてまいりました。90年代以降、分子生物学が目覚ま しい勢いで発展を遂げ、農学の分野においてもその手法や 知識を用いた研究が必須となりました。学生諸君の頑張り と同僚の先生方からの支援をもとに何とか研究を進めてき た次第です。専門とする植物育種学の最終目標が、品質が 優れかつ地域適応性が高く、多収な作物の開発であるとす れば、これまでに得られた知見もまだそのゴールには程遠 い感がありますが、少しでもその目標に近づけることがで きたのではないかと思います。研究・教育に携わっていた だいた多くの方々に、この場をお借りして深く感謝申し上 げます。今後は、キャンパスの外からの応援になりますが、 北海道大学が、北海道の基幹大学として益々発展されるこ とを祈願しております。

略歴

生年月日昭和29年5月9日

昭和62年4月 北海道大学農学部助手

平成5年7月 北海道大学農学部助教授

平成11年4月 北海道大学大学院農学研究科助教授

平成18年4月 北海道大学大学院農学研究院助教授

平成19年4月 北海道大学大学院農学研究院准教授

平成24年4月 北海道大学大学院農学研究院教授

農学研究院教授 *** した かき ひこ **坂下 明彦 氏**



農学部で1984年に助手になり、以来35年で定年を迎えた。 農業経済学科は戦後文系学部設立に人を割いたため、5講座で助手2人という貧弱な教育体制で、助手は他大学からの出戻りが多かった。しかし、私は当時の「OD」問題を背景に院生から助手に採用され、学科では北大しか知らずに定年を迎えるレアケースの存在となった。

考えてみれば、経済環境の激変は助手になって早々の1985年頃であったが、自治を標榜する大学への浸透は遅かった。しかし、始まってみるとあっけなく独法化を迎えた。どこも準備がなかったから、本来の「競争」環境は生まれず、成果の即効性のみが求められた。腰だめの研究は回避され、社会科学でもお仕着せの論文ばかりが目立つようになった。奨学金制度が改変されてドクターコースの院生がガタ減りし、大学院大学は解体の危機にある。

農学部にも農学科がなくなったが、地球が悲鳴を上げる 今日は逆に農学の時代である。足元の北海道のフィールド ワークで基礎を固め、アジアで貢献することが古くて新し い使命であろう。

私の仕事はといえば、自分なりの北海道農業史を描き、 アジアの場で若干の応用を行った程度である。農村を歩き 回り、大学と農村地域を結ぶ拠点としてサテライトをつ くったことが、農学部へのちょっとしたお手伝いだったよ うに思う。

略歴

生年月日昭和29年11月3日

昭和52年3月 北海道大学農学部農業経済学科卒業

昭和54年3月 北海道大学大学院農学研究科修士課程修了

昭和59年3月 北海道大学大学院農学研究科博士後期課程単位修得退学

昭和59年4月 北海道大学農学部助手

平成2年3月 農学博士(北海道大学)

平成2年8月 北海道大学農学部助教授

平成11年4月 北海道大学大学院農学研究科助教授

平成15年4月 北海道大学大学院農学研究科教授

平成18年4月 北海道大学大学院農学研究院教授

平成21年4月 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター教授

平成24年4月 北海道大学大学院農学研究院教授

農学研究院教授

近藤 哲也 氏



学生時代には当時問題となっていた赤潮の原因となる水 域の過剰なN.Pを成長が極めて旺盛な浮遊性の大型水生植 物であるホテイアオイを用いて除去することを想定して, ホテイアオイの成長とそれに伴うN,Pの吸収量を試算し た。この研究が面白かったため、中学の教員を経て研究職 に就くこととなった。修士のうちは指導教員に従い、真面 目にデータを取って解析し、文章を添削してもらえば課程 を修了できたし、論文にもしてもらえた。しかし、その後 福井市に異動してからは自分一人で研究を進めなくてはな らなくなった。そのころはワイルドフラワー(外国産種子) による景観作りが流行っていたのだが、福井の美しい里山 的な景色を見ると、やはり日本の景色は在来の植物を使っ て創るべきだろうと考えるようになり、当時は景観素材と して顧みられなかった野生草花の種子発芽、増殖、導入、 管理に至るまでを研究テーマとしたのである。

北海道大学に赴任して始めに手がけたのはカタクリ種子 の発芽であるが、これまで扱ってきた種子とは違って簡単 には発芽しなかった。学生達と一緒に勉強しながら何とか 発芽に必要な条件を明らかにすることができた。その後も 北海道の様々な美しい草花の種子休眠に関する研究を続 け、興味深い情報も蓄積でき、充実した教育、研究生活を 過ごすことができた。

私にとって、北海道大学は五つめの職場である。よく言 われることであるが、人生は、運、能力、努力、人柄でほ ぼ決まり、その中でも「運」がかなりの割合を占めると。 能力、努力、人柄が十分でも「運」が開けない場合も無数 にある。しかし「良い運」に巡り会う確率を高めるために は,能力,努力,人柄が必要だと実感している。

略歴

生年月日昭和30年1月15日

昭和53年3月 大阪府立大学農学部園芸農学科卒業

昭和55年3月 大阪府立大学大学院農学研究科修士課程修了

昭和55年5月 宝塚市立長尾中学校教諭

昭和57年4月 福井県立短期大学助手

平成3年3月 農学博士(大阪府立大学)

平成5年4月 福井県農業試験場研究員

平成7年5月 福井県農業試験場主任研究員

平成8年4月 南九州大学園芸学部造園学科助教授

平成10年1月 北海道大学農学部助教授

平成11年4月 北海道大学大学院農学研究科助教授 平成18年4月 北海道大学大学院農学研究院教授

教育学研究院教授

真佐夫 氏 水野



在デンマーク26年間の研究生活ののち、2006年4月より 13年の間、本学にてお世話になり、心から御礼を申し上げ ます。この間、ヒト骨格筋の生理学・生化学という細分化 された領域の研究成果を健康教育にどのように結び付けて いくかという教育課題への貢献のみならず、大学における 管理運営と地域連携の責務を通して大学の研究者・教育者 としての素養を育てていただいたと痛感しています。4月 より青森県、八戸学院大学学長を拝命し赴任いたします。 札幌からは少し南下しますが、私にとって北に輝く星であ る本学を仰ぎながら、地域の基幹大学として地域再生を担 う次世代人材の育成に努める所存です。今後ともどうぞよ ろしくお願い申し上げます。

略歴

生 年 月 日 昭和29年9月24日

昭和52年3月 玉川大学文学部教育学科卒業

昭和55年3月 日本体育大学大学院体育学研究科修了

昭和55年8月 コペンハーゲン大学自然科学部研究生

昭和58年8月 コペンハーゲン大学自然科学部研究員

平成2年8月 Ph.D. (コペンハーゲン大学)

平成7年8月 コペンハーゲン大学医学部専任講師

平成12年1月 コペンハーゲン大学病院臨床生理学研究室室長

平成13年4月 デンマークRide County Hospital 研究部部長

平成18年4月 北海道大学大学院教育学研究科教授

平成19年4月 北海道大学大学院教育学研究院教授

平成22年 4 月 平成31年 3 月 一北海道大学環境健康科学研究教育センター(兼務)

平成26年4月7

-北海道大学スポーツトレーニングセンター長(兼務) 平成31年3月

- パペン・・ 3 7] ・北海道大学脳科学研究教育センター基幹教員(兼務) 平成31年 3 月

メディア・コミュニケーション 研究院教授

大野 公裕 氏



室蘭の高校を出て18歳で北海道大学に入学した時、まさ かその後定年退職するまで46年間もこの大学で過ごすこと になるとは思ってもいませんでした。略歴にある通り、私 は入学以来一度も北大を離れたことがありません。これほ ど長い間北大で過ごすことになったのは、学部4年になっ てそろそろ就職活動を始めようかと思っていた私を大学院 の道に誘ってくれた友人、大学院時代に学問の面白さを教 えてくれた恩師や先輩、また、当時の言語文化部に就職し てからも酒を飲み交わしながら楽しい時を過ごした。今は 同僚となったかつての文学部英文科時代の先輩や後輩、こ ういった人たちがいたおかげだと思っています。自らの幸 運と感謝の気持ちを噛み締めているところです。

平成18年度に全学教育のカリキュラム改革が行われまし たが、次の年から教育改革室員として教育組織運営の仕事 に参加し、学内運営の苦労を多少なりとも味わうことがで きたのもいい経験でした。また、最後の数年間は、所属す る学院の入試改革で教務事務の方とともに有意義な仕事が できましたし、院生の指導でも優秀な学生とともに充実し た教育と研究の日々を過ごすことができました。

人生の大半を過ごした北大とそこで出会った様々な方に 心から感謝申し上げます。

略歴

生 年 月 日 昭和29年6月27日

昭和53年3月 北海道大学文学部文学科卒業

昭和55年3月 北海道大学大学院文学研究科修士課程修了

昭和57年11月 北海道大学大学院文学研究科博士後期課程退学

北海道大学文学部助手 昭和57年12月

昭和62年4月 北海道大学言語文化部講師

平成 4 年11月 北海道大学言語文化部助教授

平成15年6月 北海道大学言語文化部教授

平成19年4月 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院教授

メディア・コミュニケーション 研究院教授

秀-杉浦



30年以上にわたり、北海道大学にお世話になりました。 教員、職員、そして学生の皆さんに深く感謝申し上げます。

教育・研究、大学行政、社会活動等々、自然体でやって きました。大したことはしませんでしたが、「過去にこだ わらない」をモットーに生きてきましたので、反省の弁は ありません。あと一年間、大学に残るので、ゆっくり後始 末に努めるつもりです。

略歴

生 年 月 日 昭和29年7月28日

昭和54年3月 一橋大学社会学部卒業

昭和56年3月 一橋大学大学院社会学研究科修士課程修了

昭和62年3月 一橋大学大学院社会学研究科博士課程単位修得退学

昭和62年4月 一橋大学社会学部助手

平成元年4月 北海道大学言語文化部助教授

平成14年4月 北海道大学言語文化部教授

平成17年9月 平成19年3月 -北海道大学言語文化部長

平成19年4月 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院教授

平成19年 4 月 平成21年 3 月 一北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院長

平成19年4月 平成21年3月 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院長

平成23年4月-

-北海道大学国際本部副本部長・留学生センター長 平成27年3月

メディア・コミュニケーション 研究院教授

山田 澤明 氏



民間企業に長く勤務した後、機会があって、大学の教員として貴重な経験をさせていただきました。「ジャパン・アズ・ナンバーワン」を著したハーバード大学名誉教授のエズラ・ヴォーゲルは、今の日本に対して、「大学の質の向上と国際化」の重要性を指摘しました。私も大学の国際化が最も重要なポイントだと考えます。私は、近年の日本の国際競争力の低下は、日本が、インターネットなどの国際的な情報環境が大きく変わったにもかかわらず、国際化の波に乗り遅れたことが大きな要因と考えています。

米国駐在時代に、二人の小、中学生の子供を現地の学校に行かせていたことがあります。この際、日本との教育の違いをいろいろ感じました。アメリカの教育は、より実践的です。また、知識よりも考え方を教える、スキルセットよりもマインドセットを重視しています。そして、インプットではなく、アウトプットで学んでいると感じます。起業家教育で有名なアメリカのバブソン大学のある教授は、「大学のミッションは、機会の提供である」、と言っていました。私は、4月から北大の東京オフィス勤務になりますが、本学学生が、国際的な舞台で活躍すべく、主体的に学びたくなる機会の提供に、微力ながら努めたいと存じます。

略 歴

生 年 月 日 昭和30年1月2日 昭和52年3月 北海道大学工学部卒業

昭和54年3月 東京工業大学理工学研究科修士課程修了

昭和54年4月 株式会社野村総合研究所入社

平成11年12月 米国野村総合研究所(Nomura Research Institute, America)社長

平成14年4月 株式会社野村総合研究所 執行役員企画・広報担当 平成19年4月 株式会社野村総合研究所 常務執行役員コンサルティング事業本部長

平成23年6月 株式会社野村総合研究所常勤監査役

平成27年4月 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院教授

メディア・コミュニケーション 研究院教授

藤野 彰 氏



大学での研究・教育に長年携わってこられた諸先生方に 比べれば、私の在職期間はわずか7年という短い期間でし たが、新聞記者出身の私にとってはそれまでとはまったく 異なる世界での新しい仕事であり、多くの貴重な経験を積 ませてもらいました。研究面では、現場のジャーナリスト としての視点とは違った立場から、現代中国やメディア・ ジャーナリズムの諸問題をじっくり探究することができ, ささやかながら、自らの思考を深めることができました。 教育面では、大学院でメディア・ジャーナリズム関連科目、 全学で現代中国入門, 中国語, メディア学入門を担当させ ていただきましたが、理論と実際の結合を心掛け、記者時 代の取材体験,中国特派員経験を多少なりとも生かすこと ができたのは幸いでした。また、研究室独自の教育活動と して、マスコミ志望の学生を対象に「北大ジャーナリズム 塾」を開設し、北海道新聞、朝日新聞など各社に前途有望 な人材を送り出すことができたことも忘れ難い思い出とな りました。退職後も引き続き研究に励み、若い人たちのサ ポートに微力を尽くすつもりです。お世話になった皆様方 に心より御礼申し上げます。

略歴

生年月日昭和30年2月4日

昭和53年3月 早稲田大学政治経済学部政治学科卒業

昭和53年4月 読売新聞東京本社編集局記者

昭和63年10月 読売新聞東京本社上海支局支局員

平成2年8月 読売新聞東京本社北京支局支局員

平成5年5月 読売新聞東京本社外報部記者

平成7年10月 読売新聞東京本社シンガポール支局支局員(支局長)

平成9年9月 読売新聞東京本社国際部次長

平成10年11月 読売新聞東京本社中国総局総局長

平成13年11月 読売新聞東京本社国際部筆頭次長 平成16年3月 読売新聞東京本社中国総局総局長

平成16年3月 読売新聞東京本社中国総局総局長 平成18年12月 読売新聞東京本社編集局編集委員

平成24年1月 フリーランスのジャーナリスト(読売新聞社社友)

平成24年4月 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院教授



博士過程を修了するとき、たまたま学科内の助手のポストが空いていたとの理由だけで、廃棄物の世界に飛び込むことになりました。当時は、ごみの収集員には結婚相手が見つからない、埋立地はカモメの乱舞といった時代で、廃棄物研究はまだ始まったばかりでした。実験が得意ではないのでごみ収集車を追いかけたのが最初の研究で、次に集めた後の資源化や焼却、最後の行き先である埋立、社会経済的側面も重要なのでコスト分析、住民意識調査など、気がつくと廃棄物処理全体がテーマとなっていました。1980年代以降、廃棄物は次々に新たな問題が発生しましたが、研究者数が圧倒的に不足しています。社会的には不幸なことですが、研究者としては幸運です。研究材料はいくらでも見つかり、先行研究が少ないので論文を読む必要がなく、自分で工夫すればよいからです。

ここ数年の大きな懸念は、現場の問題が取り残されているということです。現場を注意して見るといつも問題が見つかりますが、主として知識と関心の不足によって放置されています。論文数やインパクトファクターで研究が測られると、時間のかかる現場研究は避けられます。しかし専門度の高い論文は難しすぎ、現場ニーズと一致することはまれで、英語で書かれると実務者の目に触れる可能性はゼロでしょう。大学で廃棄物を教えても、別の分野へ就職する学生が大部分なので、役立つことは期待できません。もっと現場である自治体、実務者、そして市民へ伝えられるような仕事を、これからもしていくつもりでいます。

略歴

生年月日昭和31年1月9日 昭和53年3月 北海道大学工学部卒業 昭和55年3月 北海道大学大学院工学研究科修士課程修了 昭和58年3月 北海道大学大学院工学研究科博士課程修了 昭和58年3月 工学博士(北海道大学) 昭和58年4月 北海道大学工学部助手 平成3年1月 北海道大学工学部講師 平成4年4月 北海道大学工学部助教授 北海道大学大学院工学研究科助教授 平成9年4月 平成18年2月 北海道大学大学院工学研究科教授 平成22年4月 北海道大学大学院工学研究院教授 平成23年 4 月 -北海道大学サステイナブルキャンパス推進本部環境保全センター長 平成31年 3 月 平成28年4月 平成31年3月 北海道大学技術支援本部副本部長



学生生活を終え、北海道大学に赴任するまでの約10年間は、国内外で職場を転々としました。その間の特に海外での勤務経験はその後の自分の人生観や研究・教育に大きな影響を与えました。教育を英語で行うことで、語学の障壁がなくなり、世界中から優秀な人材を獲得できることを実感したのはこの時期です。北海道大学赴任後約10年を要しましたが、英語コースを大学院で始めることができ、その効果が認識され、工学院全体に英語コースが広がりました。優秀な教え子がアジア各地にいることから、アジアでの研究者ネットワーク(学協会)の構築や、共同研究を実施するのに大いに役立ちました。この30年は東アジア、東南アジアの研究水準が飛躍的に向上した時期だったことも幸いしました。

最近10年間は、アジアのパートナーと質の高い共同研究を実施しています。アジア各国と手を組むということは重要で、世界の各種国際活動における欧州と北米グループに対抗し、アジアの影響力を行使することが初めて可能となるからです。北海道大学を始め日本の大学は優秀な学生を世界から集めることにはある程度成功していますが、優秀な教員の確保はまだまだその途上です。近い将来、それが可能となることを祈ってやみません。そうでなければ、日本の科学技術における地盤沈下は防げないと思います。

略歴

生 年 月 日 昭和29年6月5日 昭和52年3月 東京大学工学部卒業 昭和54年3月 東京大学大学院工学系研究科修士課程修了 昭和56年11月 東京大学大学院工学系研究科博士課程退学 昭和56年12月 東京大学工学部助手 昭和57年5月 ワシントン大学工学部助手 昭和57年6月 工学博士(東京大学) 昭和59年5月 東京大学工学部講師 昭和61年3月 東京大学工学部助教授 昭和62年4月 アジア工科大学助教授 昭和64年7月 アジア工科大学助教授 昭和64年7月 北海道大学工学部助教授 平成3年4月 北海道大学工学部助教授 平成9年4月 北海道大学大学院工学研究科助教授 平成16年4月 北海道大学大学院工学研究科教授 平成16年4月 北海道大学大学院工学研究科教授 平成16年4月 北海道大学大学院工学研究科教授

工学研究院教授 梅垣 菊男 K.



30年以上を企業の研究所で過ごした後に、平成22年から 北海道大学の医学研究科に赴任いたしました。それから約 4年間、医工連携の工の立場で、最先端研究開発支援プロ ジェクトという超大型国家プロジェクトを推進し、北海道 大学病院陽子線治療センターが設立されました。放射線医 学と量子ビーム工学/加速器工学の融合で実現した最先端 がん治療の施設です。平成25年には工学研究院量子理工学 部門に移り、量子ビーム応用医工学研究室を立ち上げると 共に陽子線治療センターの副センター長を務めました。

10年弱の短い期間でしたが、北海道大学の医工連携の推 進のため、国際連携研究教育局(GI-CoRE)量子医理工学 グローバルステーションや新しい大学院. 医理工学院の設 立に関わり、とても貴重な経験をさせていただきました。 また、産業界出身でしたので、多くの国家プロジェクトを 通じて、産学連携研究開発を推進できたのも大変良かった と思っています。

これからの大学は、専門分野だけに閉じこもることな く、新しい学問と技術を融合させ、またそれを産業界とも 協力して、目に見える形で社会に還元していく姿勢が必要 だと思います。立ち上がったばかりの医工連携ですが、次 の世代の方々が発展させて行かれることを信じています。 今後少しの間、特任教員として後ろから支えられればと 思っています。

略歴

生 年 月 日 昭和29年12月29日

昭和52年3月 北海道大学工学部卒業

平成3年3月 工学博士(東京大学)

昭和52年4月一民間(株式会社日立製作所)

平成22年4月

平成22年5月 北海道大学大学院医学研究科·北海道大学病院特任教授

平成25年7月 北海道大学大学院工学研究院教授

工学研究院教授 飯場 正紀 氏



平成26年9月に北海道大学工学研究院に赴任後、4年7 か月が過ぎ、定年退職を迎えることとなりました。この間、 素晴らしい北海道大学キャンパスで、楽しい時間を過ごす ことができました。それ以前は、国立(独立行政法人)研 究機関の研究員として、専門性の高い研究者たちと仕事を していました。年齢を重ねるとともに、仕事を部下に任せ ることが多くなり、自分で手を動かすことがだんだん少な くなり、すべてが楽をする方へ流されていきました。

大学の教員としての経験がなかったため、しばらくは、 1から10まで自分のことを行う必要がありました。講義資 料として、専門的な内容の材料はたくさんありましたが、 基本的で初歩的な内容の資料が全くなかったため、講義資 料の作成に時間を要し、日々授業に追い立てられました。 講義が1つ増えるごとにため息をつき、長い1学期であっ たことを覚えています。また、卒論や修論の指導が適切で あったかについては、甚だ疑問であり、大学での教育や指 導の重要性は十分認識していながらも、私の講義・指導を 受けた院生・学生の面倒を十分見ることができなかったこ とを反省しています。

最後に、大学生活で私を支えていただいた多くの先生方 に感謝を申し上げます。

略歴

生年月日昭和30年1月1日

昭和52年3月 名古屋大学工学部卒業

昭和54年3月 名古屋大学大学院工学研究科博士前期課程修了

昭和57年3月 名古屋大学大学院工学研究科博士後期課程単位取得退学

昭和57年4月 名古屋大学研究生

昭和59年4月 建設省建築研究所研究員

平成元年4月 建設省建築研究所主任研究員

平成元年11月 建設省建築研究所企画課長補佐

平成2年11月 建設省建築研究所主任研究員

平成8年3月 建設省建築研究所研究室長

平成13年4月 独立行政法人建築研究所上席研究員

平成14年12月 博士(工学)(名古屋大学)

平成15年4月 国土交通省国土技術政策総合研究所国土交通技官

平成18年8月 独立行政法人建築研究所上席研究員

平成19年6月 独立行政法人建築研究所グループ長

平成24年4月 独立行政法人建築研究所主席研究監

平成25年4月 独立行政法人建築研究所研究専門役 平成26年9月 北海道大学大学院工学研究院教授

経済学研究院教授

佐々木 K.



平成元年に北海道大学に赴任し、 平成最後の年に定年を 迎えることになりましたので、私の北大での生活は、平成 の30年間と重なっています。赴任した年は、ベルリンの壁 が崩壊するなど、時代の転換を思わせるときでした。その ような時代から今日まで、社会も大学も、変わったところ もあれば変わっていないところもあると感じています。

私の専門は経済思想史という分野で、経済や社会につい ての考え方の変遷を辿る研究をしてきました。中心は19世 紀のイギリスでした。これについては著書を出版し、研究 成果をまとめることができましたので、よかったと思って います。一つの仕事をしている最中に新しい疑問が浮かん でくることはよくあることですが、そのおかげで定年後に 取り組む課題には事欠きません。

授業で学生に話したのは、自分の考えを相対化して捉え てほしいということでした。20歳前後に刷り込まれた考え は頑固なものですが、思想の歴史を学ぶことで、ある種の 思想がつねに優勢なわけではないということを学んでほし いと思っていました。もっとも、分かりにくいという意見 も少なからずありましたから、どこまで伝わったのかは不 明です。

略歴

生年月日昭和30年5月3日

昭和55年3月 東北大学経済学部卒業

昭和57年3月 東北大学大学院経済学研究科博士課程前期2年の課程修了

昭和60年3月 東北大学大学院経済学研究科博士課程後期3年の課程単位修得退学

昭和60年4月 東北大学経済学部助手

昭和62年4月 東北大学大学院経済学研究科研究生

平成元年8月 北海道大学経済学部助教授 平成11年8月 北海道大学経済学部教授

平成22年4月 北海道大学大学院経済学研究科教授

平成29年4月 北海道大学大学院経済学研究院教授

経済学研究院教授

K.



本学の基本理念の一つ「実学の重視」は、30余年間、私 にとって居心地よいものではなかった。私の研究が、世間 のいわゆる実学にはほど遠いからである。

学生時代に読んだ大家の一文に,「人は決められた通り には動かない」とあった。敷衍すれば、「人々が望む状態 の実現のために人々はどうすべきかが示されても、人々は それをしばしば裏切る」となろう。世間の実学への関心は 「どうすべきか」だろうが、経済理論の経済との関係をみ ると、裏切られるか、そうでなくみえる場合でも因果関係 が不明瞭なことが多い。このことは、将来も変わらないで あろう。複雑で変遷し続ける社会現象としての経済に関す る理論は精密に構成されるが、人々の現実の営みに連なる 「前提」全てが知られることはない。経済理論が論証の正 しさや精密さに注力しがちなのはそのゆえだろうし、それ が非難されるべきこととは思えない。

しかし、そうした注力は、理論の正しさや精密さを担保 する「前提」について反省し、「どうすべきか」をどう考 えるかの手掛かりにはなりうる。私が微力ながらも「実 学」に貢献しえたとすれば、その意味においてになろう か。

本学教職員・学生の皆さんの日々の営みが、直接間接に 本学の理念の実現に連なるものであることを期待してい る。

略歴

生年月日昭和29年10月8日

昭和52年3月 東北大学経済学部卒業

昭和52年4月 昭和54年3月 民間(株式会社富士銀行)

昭和54年4月-

東北大学経済学部研究生

昭和55年3月

昭和62年3月 東京大学大学院経済学研究科第二種博士課程単位修得退学

昭和62年 4 月 昭和62年 9 月 民間(財団法人日本証券経済研究所研究員)

昭和62年10月 北海道大学経済学部助教授

平成11年8月 北海道大学経済学部教授

平成12年4月 北海道大学大学院経済学研究科教授

平成29年4月 北海道大学大学院経済学研究院教授

医学研究院教授

松居 喜郎 K.



13年間北海道大学循環器・呼吸器外科教授を担当させて いただきました。在任中、特に2017年には日本胸部外科学 会を札幌で開催できました。テーマはBoys be ambitious! But stay humbleとクラーク博士の言葉に謙虚であれとい う言葉をつけさせていただきました。自分のやってきたこ とが本当に正しいのか医師として常に謙虚であれという意 味です。私の研究テーマは主に重症心不全外科の確立でし た。幸い北海道大学病院は2010年7月心臓移植施設として 認定され、2014年1月和田移植から46年ぶりの北海道での 心臓移植再開をはたせました。また2011年4月には植込型 人工心臓認定施設となり、心不全患者が自宅での生活が可 能となりました。心臓移植や人工心臓前に何ができるかを 検討し、独自のオーバーラッピング型左室形成術を開発し 多数の症例を得ました。さらにこの左室形成術の限界と適 応を検討し、合併する僧帽弁逆流に対する新しい術式を報 告し注目されています。まだまだ私にとり重症心不全治療 は「見果てぬ夢」です。今後も外科手術を続けその可能性 を突き詰めていく所存です。

略歴

生年月日昭和29年7月29日

昭和55年3月 北海道大学医学部卒業

昭和60年10月7

フランス パリ第12大学外科研究センター 昭和61年10月 ┛

昭和63年11月 北海道大学医学部附属病院助手 平成元年12月 医学博士(北海道大学)

平成2年11月 北海道大学医学部助手

平成4年6月 アメリカメイヨークリニック 文部省在外研究員

北海道大学医学部助手 平成5年4月

北海道大学医学部附属病院講師 平成6年4月

平成6年10月 北海道大学医学部附属病院助教授

平成12年9月 NTT東日本札幌病院 心臓血管外科部長

平成16年4月 池上総合病院 ハートセンター長

平成18年4月 北海道大学病院教授

平成22年4月 北海道大学大学院医学研究科教授

平成25年4月 北海道大学病院副病院長平成31年3月

平成29年4月 平成31年3月 一北海道大学大学院医学研究院教授

北海道大学副学長,北海道大学病院長, 北海道大学病院教授

清博 寶金 氏



私は小学校が,北大の近くに位置する桑園小学校でした。 当時、北大農場は、フェンスもなく、真冬の農場は、一面 の雪原でした。小学生低学年の頃、真冬の北大農場を何度 も「大横断冒険旅行」と称して、何人かの友人達と、雪に 埋まりながら、北大のクラーク像まで、踏破しました。小 学生の僕たちにとっては、大冒険でした。

中学生の頃は、お隣の札幌医大において日本で最初に行 われた和田心臓移植を知り、医学への道を志しました。そ して、北大病院の心臓外科に入院していた親友の見舞いに 何度も北大病院を訪れました。

また、大人びた高校生の頃、大学紛争で、北大本部前 で、学生と機動隊が衝突するのも、身近で目撃しました。

それほど、私にとっては、北海道大学は、身近な大学で した。ここで、自分の望む研究、診療に関わり、そして、 私たちの後輩を教育することができた数十年は、最も自然 な成り行きであったと、今、思いを深くしています。

その意味で、自分の生まれ育った故郷に北海道大学が あったことに、改めて、運命を感じております。

今後も、卒業生の一人として、北海道大学の発展に微力 ながら関わり、あるいは、見届けていきたいと思っていま す。

略歴

生 年 月 日 昭和29年9月24日

昭和54年3月 北海道大学医学部卒業

昭和61年11月 平成元年 1月 米国カリフォルニア大学デービス校客員研究員

平成2年7月 北海道大学医学部附属病院助手

平成3年3月 医学博士(北海道大学)

平成4年6月 北海道大学医学部附属病院講師

平成8年11月 米国スタンフォード大学,英国王立神経研究所(文部省在外研究員)

平成12年11月 北海道大学大学院医学研究科助教授

平成13年11月 札幌医科大学医学部教授

平成22年3月 北海道大学大学院医学研究科教授

平成22年9月 北海道大学病院副病院長

平成25年4月 北海道大学病院長, 北海道大学病院教授

平成25年4月 北海道大学副理事

平成29年4月 北海道大学副学長



着任して以来、あっという間の23年でした。この間、寒 冷圏における植物の生態と生理の研究を続けてきました。 主な研究対象は、北海道やロシア・カムチャツカなどの北 方林、ヨーロッパの山地草原などでした。寒冷圏における 環境ストレス(低温,乾燥,強光)に対して植物がどのよ うに耐え、どのように生存と繁殖を行っているのか、寒冷 圏の生物多様性を支えている仕組みは何か、これらが近年 の気候・環境変動からどのような影響を受けているのかな どについて、現地での生態調査、高照度低温植物培養室を 用いた実験、数理モデルの構築などにより研究してきまし た。発表しきれていないデータもまだ残っています。この 4月からは2年間の特任という立場になりますが、共同研 究者の皆さんと協力して未発表データの解析と論文作成に 注力したいと思います。この23年間、多くの人たちと自由 に楽しく研究を行うことができました。そのような環境を 与えていただいた北海道大学と低温科学研究所に、また研 究室のスタッフ, 大学院生, ポスドク, 研究支援推進員, 秘書の皆様、学内外の共同研究者の皆様に心より感謝申し 上げます。どうもありがとうございました。そしてこのあ との2年間もどうぞよろしくお願いいたします。

略歴

昭和53年3月

昭和55年3月 京都大学大学院理学研究科修士課程修了昭和58年3月 京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了昭和58年3月 理学博士(京都大学)昭和58年4月 京都大学理学部研修員昭和59年4月 日本学術振興会奨励研究員昭和60年10月 日本学術振興会特別研究員昭和62年4月 京都大学理学部研修員昭和63年10月 東京都立大学理学部助手平成7年4月 東京大学教養学部助教授平成8年3月 北海道大学低温科学研究所教授

京都大学理学部卒業

生年月日昭和30年7月19日



1982年に東京慈恵会医科大学を卒業し、国家公務員共済 虎ノ門病院の呼吸器科のスタッフとして診療と研鑽をしま した。1990年に米国国立衛生研究所で基礎研究をはじめ、 1998年米国ハーバード大学のベスイスラエル病院で自身の 研究室を立ち上げ、細胞の増殖、細胞死制御の要としての セリンスレオニンキナーゼAKTとヒト疾病の機序の解明 に向けた研究を始め、2002年遺伝子病制御研究所の癌生物 分野に教室を持つ機会をいただきました。

これまで「ヒト伴性重症複合免疫不全症(XSCID)の 原因遺伝子としてのサイトカイン受容体コモンガンマ鎖の 解明」「ヒトT細胞芽球性白血病の原因遺伝子の解明」、 「ダウン症の責任遺伝子の機能解明」、「ヒト多発性嚢胞症 の発症の分子機構の解明」などの研究を手がけました。こ れらの研究成果に基づき欧米諸国でXSCIDに対する遺伝 子治療の臨床応用などの成果が報告されています。これら の研究は決して私たちの教室の仲間たちだけではなく、医 学研究院, 北海道大学の研究部門や教室との共同研究に よって初めてなしえた研究成果であり、本大学において研 究を展開する機会をいただいたことに感謝の意を示したい と思います。また私たちの教室で育ったポスドクなどの若 手研究員も米国など海外の研究室で勉学などを続けてお り、今後の北海道大学の発展とともに、教室の仲間がこれ までの研究を踏まえて未解決の細胞生物反応の制御機構を 解明し、ヒト疾病の撲滅に向けさらなる研究を進めてくれ ることを願ってやみません。

略歴

· H /	
生年月日	昭和30年5月2日
昭和57年3月	東京慈恵会医科大学 医学部卒業
昭和57年4月 昭和59年3月	上国家小路員共落連合会園の門病院内科前期レジデント
昭和59年4月	∼国家公務員共済連合会虎の門病院内科後期レジデント
昭和61年3月	(呼吸器内科専攻)
昭和61年4月	国家公務員共済虎の門病院呼吸器科医員
	(総合内科専門医,アレルギー専門医,感染症専門医)
平成2年4月	Visiting Associate/Scientist, Molecular Immunology,
	米国国立衛生研究所
平成10年8月	Assistant Professor of Medicine, Division of Immunology, Beth
	Israel Deaconess Medical Center, Harvard Medical School, USA
平成11年9月	医学博士 (内科, 東京慈恵会医科大学)
平成14年10月	北海道大学遺伝子病制御研究所教授

北方生物圏フィールド科学 センター教授

本村 氏



本学理学部卒業後、海藻の生活環制御の研究をしたいと 思い、当時の室蘭海藻研究施設で大学院生活を送り、その まま40年間を地方施設で過ごしました。この間、2001年に 札幌農場, 植物園とともに農学部, 水産学部, 理学部の地 方施設が統合され、北方生物圏フィールド科学センターと なりました。2012年には現在の新実験所に移転することが でき、チャラツナイ浜の時と比べると、格段に管理運営が 楽になり、利用者にも不自由を強いることがなくなりまし た。この年、厚岸臨海実験所とともに文部科学省教育関係 共同利用拠点に採択され、現在2期目となりました。また センター長在任中には、北は天塩研究林、南は和歌山研究 林、東は厚岸臨海実験所、西は檜山研究林と16箇所のすべ ての歴史ある施設を訪れることができました。総面積で東 京23区よりも大きなセンター組織は、北大近未来戦略150 に書かれているように、様々なフィールドを用いて特色あ る現場教育・研究を担う、他大学にはない北大の特色であ り, 今後も本学のみならず, 国内他大学, 海外大学の学生・ 研究者と質の高い教育・研究を実践していくものと考えて おります。在職中にお世話になりました全ての方々に感謝 いたします。

略歴

生年月日昭和30年3月23日 昭和54年3月 北海道大学理学部生物学科卒業 昭和56年3月 北海道大学大学院理学研究科修士課程修了

昭和60年3月 北海道大学大学院理学研究科博士後期課程単位修得退学

昭和60年4月 日本学術振興会奨励研究員

昭和60年9月 北海道大学大学院理学研究科博士後期課程修了

昭和60年9月 理学博士(北海道大学) 昭和61年4月 日本学術振興会特別研究員

昭和62年6月 北海道大学理学部附属海藻研究施設助手

平成10年9月 北海道大学理学部附属海藻研究施設助教授

平成13年4月 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター教授

・パムシー * 77 平成30年3月

理学研究院准教授 髙田 泰弘 K.



昭和29年に本学の医学部付属病院にて生を受けて以来, 転校で数年間離れた以外は札幌で過ごし、昭和48年に北海 道大学理類に入学しました。以来,46年間の長きにわたり お世話になりました。理学部生物学科(植物学専攻)に進 級後、低温で生育可能な好冷性細菌の研究を始めたばかり の講座で卒業研究を行いました。当時研究室では、好冷性 細菌が低温下で生育できるメカニズムの解明をめざして、 研究室の各メンバーが分担してさまざまな面から手探りで 研究を進めていました。当初軽い気持ちで、"一年間の卒 業研究だけでも"と研究を始めましたが、しばらくすると この研究テーマにすっかりのめり込んでしまい、幸運にも 以来そのまま本学で研究を続けることになりました。この 間必ずしも順風満帆ではなく,後悔することもありました。 しかしここまで研究を続けていくことができましたのも、 講座の先生や諸先輩、まわりの教職員の皆様や素晴らしい 学生・大学院生の方々のご支援・ご協力があったからこそ で, 心より感謝申し上げます。

特任教員としてもう一年間勤務いたしますが、これまで 当たり前に感じていた北海道大学の素晴らしさをあらため て心にとどめたいと思います。

略歴

生 年 月 日 昭和29年12月3日

昭和52年3月 北海道大学理学部卒業

昭和58年6月 北海道大学大学院理学研究科博士課程単位修得退学

昭和58年7月 北海道大学理学部助手 平成元年6月 理学博士(北海道大学)

平成3年10月 北海道大学理学部講師

平成7年4月 北海道大学大学院理学研究科講師 平成14年7月 北海道大学大学院理学研究科助教授

平成18年4月 北海道大学大学院先端生命科学研究院助教授

平成19年4月 北海道大学大学院先端生命科学研究院准教授

平成22年4月 北海道大学大学院理学研究院准教授

農学研究院准教授

おう **干** 秃峰 K.



定年退職を迎えるにあたり振り返ると、私の中国と日本 での生活は、丁度半々となりました。

中国での半生は、まさに波瀾万丈でした。高校卒業後、 黒竜江省から新疆ウイグル自治区に下放され, 私は一生, 遊牧民として生活を送るつもりでした。ところが文化大革 命が終了し、全国大学統一試験の一期生として大学に入学 することでき, 運命が動き出しました。

1987年IICAの研修生として、つくば学園都市の農林水 産省農業環境技術研究所に約1年間滞在しました。北海道 大学農学部農業物理学研究室を訪問する機会を得て、農業 におけるリモートセンシング研究に非常に興味を持ち、1 年後、北海道大学の留学生となりました。修士、博士、研 究員などを経て、1998年助手として採用され、今日まで30 年以上北海道大学のキャンパスで充実した日々を送ってま いりました。

研究成果を回顧すると,「農業気象における衛星データ の解析と応用に関する研究」で日本農業気象学会学術賞を 受賞したことが、まず思いおこされます。また、優秀な博 士課程の学生に恵まれ、最近5年間で、学生と共に 「Environmental Pollution」などの国際誌に20編以上の学 術論文を掲載することができました。院生との研究の日々 は、私にとってかけがえのない思い出です。

さらに、在職最後の2年間、総長補佐に任命され、日中 両国の大学間国際交流に微力ながら貢献することができ, 北海道大学に恩返しできたこと、心から嬉しく思います。 末筆ながら、母校のますますのご発展をお祈りいたしま す。

略歴

生年月日昭和30年2月21日

昭和57年1月 中国黑龍江省畜牧獣医学校大学班農学専攻卒業 (中国東北農業大学学士学位)

昭和57年2月 中国黒竜江省農業科学院研究職昭和63年11月

平成3年3月 北海道大学大学院農学研究科修士課程修了

平成6年3月 博士(農学)(北海道大学)

平成 9 年 4 月 平成10年 3 月 民間(財団法人北海道農業近代化コンサルタント研究部技師)

平成10年4月 北海道大学農学部助手

平成11年4月 北海道大学大学院農学研究科助手

平成14年4月 北海道大学大学院農学研究科講師

北海道大学大学院農学研究院講師 平成18年4月

平成24年4月 北海道大学大学院農学研究院准教授

メディア・コミュニケーション 研究院准教授

川嵜 義和



この度、長くお世話になりました北海道大学を定年退職 することとなりました。振り返りますと、1990年代の大学 改革以前に学生生活を送り、今のように博士論文を書く必 要のない、のんびりした時代でした。1,2年の教養部で 習った古代ギリシア語やラテン語に強く引かれ、理学部か ら文学部の3年次に転部しました。それ以来特に古代ギリ シア学を専門とし、中でも写本に基づく原典復元、原典批 判を主な対象とする文献学を学び、学生の頃からテキスト の字句の穿鑿に明け暮れました。

古典学はなかなか職のない分野です。幸い平成11年4月 に言語文化部の講師として着任しました。ところが翌年 「大学院国際広報メディア研究科」が発足し、今後いかに 転身すればよいのか悩みましたが、何とかメディア関係の 授業を担当し、新聞や広告の文体に関する興味深い研究に 触れることができました。後にメディア文化論講座に移行 してからは、古代の競技、特に古代オリュンピア競技会の 歴史や文化の研究に取り組みました。しかし、どうしても 学生の頃の文学研究に戻ってしまい、研究が捗らない状況 に陥りましたが、どうにか定年まで教育や研究に機会を与 えて頂きました。全学教育では古典ギリシア語及びラテン 語の他、英語の授業も続けさせて頂き、よい学生に恵まれ たと思っています。

最後に、これまで支えて頂きました多くの先生方や事務 職員の方々に感謝するとともに、北大の益々のご発展をお 祈りいたします。

略歴

生年月日昭和29年4月5日

昭和55年3月 東京大学文学部西洋古典学専門課程卒業

昭和58年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了

昭和63年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位修得退学

平成元年4月 東京大学文学部助手

平成7年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助手

平成11年4月 北海道大学言語文化部講師

平成18年4月 北海道大学言語文化部助教授

平成19年4月 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授

歯学研究院准教授 正恭 K. 齋藤



学生時代も含め、札幌に来てから45年がたちました。今 では第2の故郷ではなく故郷そのものになっています。来 ることになったきっかけは1972年の札幌オリンピックをテ レビで見たことによる, 北海道, 札幌への憧れでした。初 めての一人暮らしにホームシックにかかりながらも友人や 北海道の自然に囲まれ楽しい学生時代を過ごすことができ ました。

卒業後は歯科補綴学第一講座に入局しました。補綴学 (有床義歯) には興味があったものの、わからないことが 多かったことと, 何年後かの開業を考え歯科の分野で柱の 一つである補綴を選択しました。入局した同期とは「よい 歯科医」をめざしてお互いに切磋琢磨し、補綴について熱 く語り合い、時には「すすきの」で朝まで議論したことも ありました。振り返ると当時の情熱とパワーを懐かしく思 います。補綴学は知れば知るほどまた新たな疑問が湧き出 て、これが研究へとつながっていったのだと感じます。長 く臨床と研究に携わってきて、少しは頂上に近づいたとは 思いますが、まだ到達していません。頂を目指すのは後輩 たちにバトンタッチしたいと思います。最後に、お世話に なりました先輩の諸先生方、同期、後輩やスタッフの皆様 に深く感謝するとともに、北大の益々の発展を祈念いたし ます。

略歴

生 年 月 日 昭和30年11月2日

北海道大学歯学部歯学科卒業 昭和55年3月

昭和55年5月 北海道大学歯学部助手

昭和62年3月 歯学博士(北海道大学)

昭和63年8月 北海道大学歯学部附属病院講師

平成13年4月 北海道大学大学院歯学研究科・歯学部講師

平成17年10月 北海道大学大学院歯学研究科助教授 平成19年4月 北海道大学大学院歯学研究科准教授 平成29年4月 北海道大学大学院歯学研究院准教授

北方生物圏フィールド科学 センター准教授

清水 晋 氏



平成2年に水産学部に採用され、無事に定年退職を迎え ます。北海道大学に入学して以来、先生方・職員の皆様に は長きに渡ってご指導・ご鞭撻をいただき、本当にお世話 になりました。

釣漁具の漁獲特性に関する研究で博士学位をいただき. マグロ延縄のウミガメ混獲回避釣針の開発、沿岸延縄漁業 や定置漁業における混獲投棄に関する研究、近年は道南太 平洋沿岸に来遊するウミガメの回遊生態の研究へと広がり ました。

試作したウミガメ混獲回避釣針 (まずは致命傷を与えな いように釣針が喉奥には針がかりせずに口元で針がかりす る釣針)は、沿岸マグロ延縄実習において通常のマグロ釣 針と同等に釣獲することができました。また、毎年定置網 に入網したウミガメを標識放流した結果. ウミガメは夏に 道南へも来遊して秋に小笠原や九州へも回遊することが判 りました。まだ充分な成果に至っておらず、今後の展開を 願っております。毎年ご協力くださる道南の漁業者の皆様 に厚くお礼申し上げます。

こうした研究は、北海道大学の皆様ならびに卒業生の皆 様のご支援・ご協力によって行なわれ、漁業実習では付属 練習船の皆様の技能に助けられて大きな成果を得ました。 学生の皆さんも興味を持って調査研究に参加されました。 皆様のご指導・ご支援に厚くお礼申し上げます。

略歴

昭和53年3月 北海道大学水産学部漁業学科卒業

昭和57年3月 北海道大学大学院水産学研究科修士課程修了 昭和63年3月 北海道大学大学院水産学研究科博士後期課程单位修得退学

平成2年3月 水産学博士(北海道大学) 平成2年5月 北海道大学水産学部助手 平成10年11月 北海道大学水産学部助教授

平成28年4月 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター准教授

工学系事務部長

かつやま のりあき 勝山 憲明 氏



昭和54年5月に室蘭工業大学から本学に転任となり、その後、旭川医科大学、帯広畜産大学を経験させて頂き、この度退職を迎えることとなりました。北海道大学での約35年間、様々な仕事や職員野球部に携わり多くの方々と出会うことができ、充実した日々を過ごすことが出来ました。これもひとえに先輩、同僚、後輩の皆さまの暖かいご指導、ご支援があってのことと厚くお礼申し上げます。

最後になりましたが、国立大学法人は今後も大学改革の 着実な実行や評価による資源配分の拡大など厳しい状況が 続くと思いますが、北海道大学の益々の発展と皆様のご健 勝とご活躍をお祈り申し上げます。長い間お世話になり本 当にありがとうございました。

略歴

生 年 月 日 昭和33年12月23日

昭和52年4月 室蘭工業大学

昭和54年5月 北海道大学

平成11年4月 旭川医科大学総務部会計課用度第一係長

平成12年4月 旭川医科大学総務部会計課司計係長

平成14年4月 北海道大学経理部主計課第二予算掛長

平成15年4月 北海道大学経理部主計課第一予算掛長

平成16年4月 北海道大学財務部主計課総括予算係長

平成17年4月 北海道大学財務部主計課課長補佐

平成21年4月 北海道大学企画部企画調整課長

平成23年4月 北海道大学総務企画部企画課長

平成24年4月 帯広畜産大学財務課長

平成26年4月 北海道大学研究推進部研究振興企画課長

平成28年4月 北海道大学研究推進部次長(兼)研究推進部研究振興企画課長

平成29年4月 北海道大学工学系事務部長

監査室長

斎藤 **之史** 氏



就職して野球を始めた。野球は工学部に配属された新人の日課であり、春先は残雪の中庭でCボールや雪が溶けた前庭でハーフ打撃を行っていたが、朝練にはほとんど行かなかった。夏になり、監督から秋に行われるK工大とA高専との定期戦に向けて、昼休みに百球のP練習を命じられたが、やっつけ特訓の甲斐無く、四死球連発でK工大には5年間一度も勝てなかった。S57年に全北大野球部に入部した。数年後、市内の大会で頼もしい先輩達のおかげで優勝し、部長宅での優勝祝いは嬉しかった。ノーコンは不治のままだったが。

肩を壊して引退を考えていた頃、S新山で行われる雪合戦の出場チームを募集している記事を見つけ、仲間を集めてH3年の大会に参加した。T温泉に泊まり、遊び気分で始めたが、競技としての面白さにはまり、H5年から連続出場している。道央地区での優勝やS新山(=世界)3位は、仲間に恵まれたことを誇りに思う。

野球に出会い、雪合戦にはまり、仕事もきっちり?こなし、沢山の方と美味しく楽しくお酒をいただいた。仕事でお世話になった方は勿論、野球と雪合戦で出会った沢山の方にも心から感謝するとともに、今後の後輩達の活躍を楽しみにしています。

略歴

生年月日昭和34年3月8日

昭和52年4月 北海道大学工学部経理課経理掛

昭和56年3月 北海学園大学経済学部卒業

平成11年4月 国立日高少年自然の家庶務課会計係長

平成14年4月 北海道大学経理部管財課第一管財係長

平成19年12月 北海道大学学術国際部研究協力課課長補佐

平成22年4月 北海道大学財務部主計課財務管理室室長補佐

平成23年4月 北海道大学研究推進部研究企画·推進課外部資金戦略室長

平成24年4月 北海道大学研究推進部外部資金戦略課長

平成27年4月 北海道大学監査室長

歯学事務部事務長

びとし **仁 氏** 柴田



昭和52年4月に開院間もない旭川医科大学に採用され、 10年半勤務した後、本学に転任となり、その後の釧路工業 高等専門学校での勤務を含め42年間の勤務を経て、このた び定年を迎えることとなりました。

この間、緑溢れる素晴らしいキャンパスの中で、仕事は もとより、好きな野球・バドミントン等スポーツを通じ沢 山の方々と交流させていただき、本当に充実した時間を過 ごさせていただきました。また、それぞれの職場におい て、様々な仕事に携わり多くの方々との出会いがあり、意 義深い日々を過ごすことができましたことは、ひとえに多 くの良き先輩, 同僚, 後輩, 並びに先生方の公私にわたる 温かいご指導とご支援の賜と深く感謝し、心から厚くお礼 申し上げます。

国立大学法人を取り巻く環境は、年々厳しさが増します が、北海道大学が地域に愛され、世界に輝く大学として 益々発展し続けることを祈念いたしますとともに、皆様方 のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。長い間お世話に なり本当にありがとうございました。

略歴

生 年 月 日 昭和33年12月27日 昭和52年4月 旭川医科大学業務部医事課 旭川医科大学総務部会計課 昭和60年4月 昭和62年10月 北海道大学附属図書館整理課 昭和63年4月 北海道大学附属図書館情報管理課 平成元年4月 北海道大学農学部附属農場 平成3年4月 北海道大学経理部主計課 平成5年7月 北海道大学免疫科学研究所会計掛会計主任 平成7年4月 北海道大学経理部経理課給与掛給与調査主任 平成10年4月 北海道大学経理部経理課第一用度掛物品管理主任 平成11年4月 釧路工業高等専門学校会計課総務係長 平成14年4月 北海道大学医学部附属病院管理課専門職員 平成15年10月 北海道大学医学部· 南学部附属病院管理課專門職員 平成17年10月 北海道大学病院経営企画課経営分析係長 平成18年4月 北海道大学財務部調達課管理係長 平成19年4月 北海道大学財務部調達課係長 平成20年4月 北海道大学理学·生命科学事務部事務課課長補佐 平成21年4月 北海道大学総務部広報課課長補佐 平成23年4月 北海道大学総務企画部広報課課長補佐 平成24年4月 北海道大学低温科学研究所事務長 平成28年4月 北海道大学歯学研究科・歯学部事務長 平成29年4月 北海道大学歯学事務部事務長

北方生物圏フィールド科学 センター事務長

すぎやま じゅんいち 杉山 淳一 氏



学生時代は自分が大学職員になるとは一度も想像したこ となどありませんでしたが、大学受験に失敗し浪人時代に 公務員試験に合格していたことから、旭川医科大学に採用 となり、学生ではなく職員として大学にお世話になること となりました。

昭和59年に本学に転任となり、東京大学北海道演習林で の3年間,日本学生支援機構での2年間を含め41年の勤務 を経て、平成最後の年に定年を迎えることとなりました。

本学での勤務は通算30年となりますが、この間、入試 課, 留学生課, 厚生課, 北方生物圏フィールド科学セン ターなど様々な分野の職場において、有意義な日々を過ご すことができましたことは、ひとえに良き先輩、同僚、後 輩、並びに先生方の公私にわたる温かいご指導とご支援の 賜と深く感謝しております。

41年間を振り返ってみますと、嬉しかった事、辛かった 事等色々ありましたが、その中でも、入試課在籍時に分離 分割入試の導入に携わったこと、学寮担当から異動する際 に、恵迪寮執行部の学生から花束をもらったことなどが忘 れられない思い出となっています。

最後になりますが、北海道大学が益々発展し続けること を祈念いたしますとともに、皆様方のご健勝とご活躍をお 祈り申し上げます。

長い間お世話になり本当にありがとうございました。

略歴

生 年 月 日	昭和33年12月27日
昭和52年3月	北海道岩見沢西高等学校卒業
昭和53年7月	旭川医科大学業務部医事課
昭和59年9月	北海道大学厚生課
昭和62年5月	北海道大学庶務部入試課
平成3年4月	北海道大学庶務部留学生課
平成4年4月	北海道大学庶務部留学生課第二留学生掛修学指導主任
平成7年4月	北海道大学学務部厚生課付寮務主任
平成10年4月	北海道大学経済学部庶務掛庶務主任
平成11年10月	東京大学農学系学術国際課附属演習林北海道演習林庶務掛長
平成14年9月	北海道大学教育学研究科・教育学部庶務掛長
平成17年4月	北海道大学学術国際部国際企画課国際企画係長
平成18年7月	北海道大学医学事務部事務課庶務第二係長
平成19年4月	北海道大学医学系事務部総務課係長
平成21年4月	独立行政法人日本学生支援機構北海道支部副支部長
平成23年4月	北海道大学工学系事務部総務課課長補佐
平成25年4月	北海道大学工学系事務部情報科学研究科事務課長
平成29年4月	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター事務長

北海道大学病院看護部長 ひとみ 氏



昭和55年に北海道大学医学部附属看護学校を卒業し、北 海道大学医学部附属病院に採用され、39年間勤めさせてい ただきました。今でも心に残る患者さんとの会話や風景が いくつも思い浮かびます。未熟で看護師としても半人前で あったあの頃をふり返ると、患者さんには本当に気の毒で 申し訳ないことをしたと思います。ボロ雑巾のように疲れ きる毎日でしたが、精いっぱい働けたのは若さの賜物で あったと思います。

私が看護師になって本当に良かったと思うことは、患者 さんの人生の最も厳しい一場面の傍らで、患者さんの生き 方から人が生きるということ、人としてのあり方や、人生 を学ばせていただけたことです。また私は、医療情報部と いう電子カルテや電子看護記録を扱う部門で開発・運営に 携わりました。医療の世界とは全く違う企業の方に、医療 や看護を説明し、新しいシステムを創造していく貴重な機 会でした。この経験は、看護を深く考える機会であり、大 学院進学の動機になりました。この長い職業生活が、自分 の考え方や人との接し方、物ごとの進め方、言葉の使い方 等、ずいぶんと育ててくれたように思います。長い間お世 話になった北海道大学病院にあらためて感謝いたします。

略歴

生年月日昭和33年5月25日

昭和55年3月 北海道大学医学部附属看護学校卒業

昭和55年4月 北海道大学医学部附属病院看護部

平成2年4月 北海道大学医学部附属病院看護部副看護婦長

平成7年4月 北海道大学医学部附属病院看護部看護婦長

平成20年3月 北海道大学大学院医学研究科博士課程修了

平成20年3月 博士(医学)(北海道大学)

平成24年4月 北海道大学病院看護部副看護部長

平成28年4月 北海道大学病院看護部長

■レクリエーション

昭和新山国際雪合戦大会に今年も出場

2月23日(土)・24日(日)の2日間にわたり、第31回昭和新山国際雪合戦大会が、洞爺湖にほど近い昭和新山山麓を舞 台に開催され、本学職員雪合戦部から一般2チーム、レディース1チームが出場して熱戦を繰り広げました。

雪合戦は、監督と選手7人で1チームを組み、1セット3分間で雪球90球を使い、相手に雪球を多く当てるか、相手陣地 の旗を奪えば勝利となるスポーツです。壮瞥町が町おこしとして始めてから31年、今や日本国内のみならずカナダ、フィン ランドなど多数の国でも競技大会が行われています。シェルターと呼ばれる雪の壁で相手の攻撃を防ぎながら、速く球を投 げるだけでなく、山なりに投げるロブや息を合わせた集中攻撃を駆使して戦うため、駆け引きや戦術の幅の広さが競技とし ての大きな魅力です。

一般の部に出場した「余暇研究会」は、初日の予選リーグで岩手県代表、オホーツク地区代表チームとそれぞれ対戦。奮 闘しましたが僅差で2敗を喫し、惜しくも予選リーグ突破はなりませんでした。

同じく一般の部でシード枠を保持している「余暇研X」は、2日目の準決勝トーナメントから出場し、予選リーグを勝ち 抜いてきたチームを相手に勝利を重ね、決勝トーナメントに進出。決勝トーナメントでは初戦で前回大会優勝チームと当た り、2セット連取されて敗退しましたが、100以上の出場チームの中でベスト16という好成績を収め、5年連続となるシー ド枠を確保しました。

レディースの部に出場した「余暇研Q」は、初日の予選リーグで前回大会優勝の岩手県代表チーム、群馬県代表チームと 戦い、1勝1分けながら成績率により決勝トーナメントに進出。決勝トーナメント第1試合でフルセットの奮闘むなしく敗 退しましたが、ベスト8という好成績を収めることができました。

職員雪合戦部は毎年12月~3月の冬季間のみ活動しており、学内の様々な職種の職員が参加しています。まずは見学から でも結構ですので、興味を持たれた方は、お近くの部員にお問い合わせください。

(職員雪合戦部)



雪玉をぶつけられぬよう攻め込みます



昭和新山国際雪合戦会場



攻撃を繰り出そうとする雪合戦部齋藤部長

■諸会議の開催状況

役員会(平成31年2月4日)

案・クロスアポイントメント制度の改正について

- ・就業規則関連規程の一部改正について
- ・クロスアポイントメントの適用について
- ・国立大学法人北海道大学職員給与規程等の一部改正について

協議事項・高等教育推進機構の改組等について

報告事項・超過勤務実績について

・2019年度運営費交付金等(予定額)及び評価に基づく資源配分について

役員会(平成31年 2 月10日)

案・総長の復帰の判断について

教育研究評議会(平成31年 2 月13日)

題・高等教育推進機構の改組等について

報告事項・全学運用教員の措置について

- ・全学運用教員の中間評価の報告について
- ・寄附部門の設置について
- ・平成30年度運営費交付金の追加配分について
- ・2019年度運営費交付金等(予定額)及び評価に基づく資源配分について

役員会(平成31年2月20日)

案・高等教育推進機構の改組等について

・クロスアポイントメントの適用について

※規程の制定,改廃については,「学内規程」欄に掲載しています。

■学内規程

国立大学法人北海道大学契約職員就業規則等の一部を改正する規則

(平成31年2月5日海大達第9号)

国立大学法人北海道大学職員給与規程の一部改正に伴い、当該規程の適用を受ける職員との均衡等を考慮し、期末手当及 び勤勉手当の支給割合の見直しを行うことに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

国立大学法人北海道大学子どもの園保育園臨時職員就業規則の一部を改正する規則

(平成31年2月5日海大達第10号)

国立大学法人北海道大学子どもの園保育園職員給与規程の一部改正に伴い、当該規程の適用を受ける職員との均衡等を考 慮し、基本給月額、期末手当及び勤勉手当の支給割合の見直しを行うことに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学特任教員就業規則の一部を改正する規則

(平成31年2月5日海大達第11号)

国立大学法人北海道大学職員給与規程の一部改正に伴い、当該規程の適用を受ける職員との均衡等を考慮し、期末手当及 び勤勉手当の支給割合の見直しを行うこと、クロスアポイントメント手当を新設することに伴い、所要の改正を行うととも に、併せて規定の整備を行ったものです。

国立大学法人北海道大学嘱託職員就業規則の一部を改正する規則

(平成31年2月5日海大達第12号)

国立大学法人北海道大学職員給与規程の一部改正に伴い、当該規程の適用を受ける職員との均衡等を考慮し、基本給月額を引き上げることに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学役員給与規程の一部を改正する規程

(平成31年2月5日海大達第13号)

国立大学法人法第35条の規定により準用される独立行政法人通則法第50条の2第3項の規定を踏まえ、役員の給与について、国家公務員の給与及び民間企業の役員の報酬等、本学の業務の実績その他の事情を考慮し、国民の理解が得られる適正なものとするため、期末手当及び勤勉手当の支給割合の見直しを行うことに伴い、職員給与における勤勉手当相当分が含まれている役員給与の期末手当について、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学職員給与規程の一部を改正する規程

(平成31年2月5日海大達第14号)

①国立大学法人法第35条の規定により準用される独立行政法人通則法第50条の10第3項の規定を踏まえ、職員の給与について、国家公務員の給与等、民間企業の従業員の給与等、本学の業務の実績並びに職員の職務の特性及び雇用形態その他の事情を考慮し、国民の理解が得られる適正なものとするため、基本給月額、初任給調整手当の月額、夜間看護等手当の額及び宿日直手当の額並びに期末手当及び勤勉手当の支給割合の見直しを行うこと、②クロスアポイントメント手当を新設することに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

国立大学法人北海道大学子どもの園保育園職員給与規程の一部を改正する規程

(平成31年2月5日海大達第15号)

札幌市から認可保育園に対して交付される補助金における人件費の算定については、国家公務員の給与を参考として算定されていることから、当該補助金の額を考慮しつつ、職員の給与について社会一般の情勢に適合したものとし、かつ、国家公務員の給与等、民間企業の従業員の給与等、本学の業務の実績並びに職員の職務の特性及び雇用形態その他の事情を考慮し、国民の理解が得られる適正な給与水準とするため、職員が受ける基本給月額を引き上げること並びに期末手当及び勤勉手当の支給割合を見直すことに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

国立大学法人北海道大学創成研究機構グローバルファシリティセンター分析・加工受託規程の一部を改正する 規程

(平成31年3月1日海大達第16号)

創成研究機構グローバルファシリティセンターにおいて、分子構造分析の分析区分の見直し及び分析料の改定を行うことに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学における教員のクロスアポイントメントの適用に関する規程の一部を改正する規程 (平成31年3月1日海大達第17号)

本学と民間企業との間で優れた業績を持つ優秀な人材の流動性を促進することで、新たなイノベーションを創出し、本学の教育研究活動の更なる発展に資するため、本学のクロスアポイントメント制度の適用対象機関を民間企業へ拡大するとともに、併せて、民間企業等からの資金を活用して、クロスアポイントメントを実施する教員への給与面でのインセンティブとしてクロスアポイントメント手当を新設することに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

国立大学法人北海道大学年俸制教員給与規程の一部を改正する規程

(平成31年3月1日海大達第18号)

国立大学法人北海道大学職員給与規程の一部改正に伴い、当該規程の適用を受ける職員との均衡等を考慮し、クロスアポイントメント手当を新設することに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

■研修

研修名:平成30年度国立大学法人北海道大学会計職員アドバンス研修「伝達力研修」

開催日: 平成31年2月20日~22日

開催場所:学術交流会館第4会議室・附属図書館本館リテラシールーム

研修目的:会計職員アドバンス研修は、適切かつ効果的な大学運営に資するため、自発的で意欲の高い職員を対象に、大学

の運営や経営に関する知識・能力を習得させることで、大学経営を支える人材となり得るスーパージェネラリス

トを養成することを目的とする。

そのうち、平成30年度については、資料作成能力を向上させること、また、上司や部下への説明能力を向上させ ることにより、組織としての意思決定の迅速化を図ることを目的とする。



講義「これからのジェネラリスト像」



講義「企画の仕方」



講義「伝え方」



西田財務部長

(財務部主計課)

■表敬訪問

海外

年月日	来 訪 者	来 訪 目 的
31.3.5	ロシア極東国立農業大学 Aleksandr Senchik 副学長	両大学の交流に関する懇談



ロシア極東国立農業大学 Aleksandr Senchik 副学長(中央左)

(国際部国際連携課)

■人事

平成31年3月1日付発令

新職名(発令事項)	氏	名	旧職名(現職名)
【教授】 大学院歯学研究院教授	飯村	忠 浩	愛媛大学学術支援センター教授

新任教授紹介

平成31年3月1日付



歯学研究院教授に

飯村 忠浩 氏

口腔医学部門口腔病態学分野

生年月日 昭和39年12月25日

東京医科歯科大学大学院歯学研究科博士課程修了(平成7年3月) 博士(歯学)(東京医科歯科大学)

骨格系の進化・発生・発達・病態の理解と育薬・創薬研究

編集メモ

- 3月を迎え、日を追うごとに春の訪 れを感じる日が多くなりましたが、ま だまだ寒い日も多く本格的な春はもう 少し先のようです。
- ●今年度の一般入試合格者発表は, 3月7日(木)及び20日(水)に行わ れました。

多くの受験生たちが家族や友人と喜 び合い, 合格発表会場は, 本学へ入学 できる喜びに満ちた笑顔で溢れました。

多くの在学生が、後輩たちへお祝いの 言葉をかけている姿が印象的でした。





2013.3.2 釧網本線 塘路~茅沼 (標茶町)

北の鉄道風景 72 塘路湖冬景色

根室本線の東釧路駅を起点とする釧網本線は、釧路川の左岸に沿って釧路湿原を北上し、網走駅に至る路線である。この路線の細岡駅から茅沼駅にかけての区間では、線路の東側に湖沼が点在している。これらは全て海跡湖であって、遠い昔、釧路湿原一帯が海であったことを成因とする。この写真の背景に望まれる塘路湖は、釧路湿原内の最大の海跡湖と

して知られている。凍結した湖に隣接する釧網本線を走っているのは、冬季限定の観光列車「SL冬の湿原号」である。来年(2020年)の冬に運行20周年を迎える同列車。その末永い運行を切に願うばかりである。

情報科学研究科 准教授 山本 学

北海道大学総務企画部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

 $\texttt{TEL}: (011) \ \ 706-2610 \ / \ \ \texttt{FAX}: (011) \ \ \ 706-2092 \ / \ \ \texttt{E-mail}: kouhou@jimu.hokudai.ac.jp$